



南・東南スラウエシの沿岸村落

古川 久雄*

1994年4月、14年ぶりに南スラウエシを訪れた。南スラウエシは1980年10月から1981年2月まで4カ月、前田成文氏をリーダーとする略称スラウエシ・リアウ計画の一員に加わり、高谷好一、田中耕司、桜井由躬雄、ハサヌデイン大学のマトウラダ、マリカールの諸氏と歩いた懐かしの地だ。その時は漁村も少し見たが、主対象は内陸集落と農業だった。今回は沿岸村落と漁業の様子を見ることが主目的である。ハサヌデイン大学と南、東南スラウエシ沿岸部村落開発研究協力を立ち上げる為の予備調査である。魚や漁具、船など全くの素人であるが、海域の生活ぶりや人の移動を主関心に歩いた。フィールドノートと写真で現地通信として報告する次第だ。

I ウジュンパンダン

1994年4月3日

パオテレ漁港周辺

昼近く、ウジュンパンダンの北のパオテレ漁港へ行く。小さな魚市場がある。既に閑散としているが、セメント床に少々魚が放り出している。鰹のようなガタオンバ、大型の魚マシドゥン（シマアジの類）など。岸壁へ出てみると1トン程の漁船（ジャロロという）が10隻ばかり接岸していて、甲板のピットから取り出した魚を籠に仕分け、少年達が岸壁へ上げている。トゥンバン（イワシ）、パリ（エイ）、マイラ（キビナゴ）、シンリリ（タカサゴの類）、アオブダイの類など。沖を見ると水平線上にバガンがたくさん見える。運び込む魚はそのバガンで捕獲したという。バガンは竹や木材で作った四角の台を海上に設置し、その下に箱状の四手網をしかけ、火光で魚群を誘導して漁

をする装置である。台は海底から杭を立てて海上に定置するものと1隻ないし2隻の船の上に設置した移動可能なものがある。

東側の青黒い水溝をこえと砂浜が200m程続き、所々にピアが突き出している。ピア付け根の砂浜にもジャロロ船がどんどん乗り付けて、テンロ（ダツの類）やマシドゥンを手でぶら下げて浜に上げ、竹籠にどんどん入れる。男や女がそれを自転車でどこかへ運ぶ。



写真1 ウジュンパンダンのパオテレ港。漁師や手伝いの子供達が獲物をどんどん運ぶ。

先程の腐ったドブ川（パナムプー運河）を南へ辿る。路地沿いに青塗りの平床家が並び、各家の戸口に小さいアウトリガーカーヌがある。通りへ出て貨物港へ行く道にはスヌー（ハタ）を開いた干魚を売る店がズラッと並んでいる。どの店も大量の干魚を竹籠に入れて客を待っている。見事な出来栄で、香港の西蜆盤あたりで見かける干魚と変わらない。

* Hisao Furukawa, 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

華人街など

炎天下をベチャでロッテルダム要塞北側の華人街へ行く。表通りは変哲もない低いビルが並ぶが、少し裏通りへ入ると屋根の形と高い壁に特徴のある華人の家が残っており、中国寺がいくつかある。その1つ天后宮は18世紀初頭に建立された寺で、たくさんの龍が屋根の上に向き合い、朱柱で支えられた三棟がある。前堂入口には慈雲普覆瞻淵島、慧日長懸耀錫江と聯がかかり、本堂は関聖天君と天后福德正神を祀る。左の祀堂には玄天上帝、後堂には仏光普照、千手観音、文昌帝君といった額が掛けられている。紙銭を売る40歳代の華人に尋ねると、この寺は福建人の寺で、仏教と儒教と道教を奉じている。この男の両親は福建省莆田の出身で、本人はウジュンパンダン生まれである。

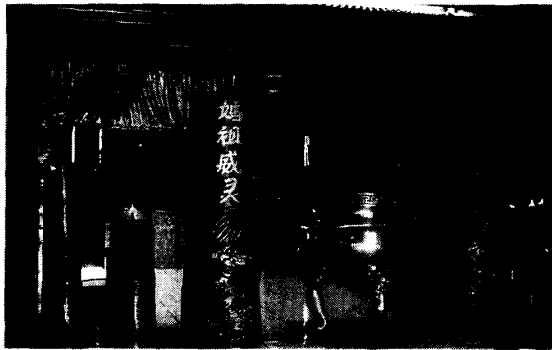


写真2 ウジュンパンダンの中国人街にある竜仙宮。華人船員の守り神媽祖と仙姑を祀る。

少し北の竜仙宮は竜頭宮と仙媽宮から成り、仙媽宮は媽祖と仙姑を祀る。天后も媽祖も華人水夫の航海を守護する女神で、天后は清朝廷での媽祖の呼び名である。媽祖信仰は福建の莆田で発生したといわれている。お産の神でもあり、丁度妊娠3カ月位の女性がポエを投げては中国式の礼拝を熱心に繰り返していた。

すぐ近くにもう1つ広東華僑の寺があり、ここは広東聯義会という華僑会の事務所も兼ねる。関聖帝廟清祭通告の張り紙がしてあるところを見ると、漢字を解する人口が相当多いようだ。湯家祖祠とある一寓に居る華人に尋ねると、ウジュンパンダンの町には数千人の広東人が居るとのことである。福建と広東の華人がたくさんいるということである。国にいた時と同じ3つの混淆宗教を奉

じ、かつて、オランダ城塞の外側に取り付いて住み着いた一角が今や巨大な町になっている。

ベチャを再び拾うと、カンボン・アラブを知っているというので行ってみる。あちこちして着いたところはディボネゴロの墓廟である。これはカンボン・アラブじゃないよと言ったあと、しかし気がついた。ディボネゴロはアラブ人だったことをベチャひきも知っているのか。知っていて連れてきたのなら驚きである。

カンボン・アラブは見つからなかったが、アラブの墓はあるというので、カンデア通りへ行く。ハサスディン大学の旧キャンパス北側の小さな一角にプルメリアの木立があり、アラブ人の墓だというイスラム墓が数百基並んでいる。

夜、ウィサタ・インに偶然同宿した東京都立大の伊藤真氏とスリヤ・レストランへ行く。カニ・エビ料理を出す。昼に会った広東聯義会館の寺番にバッタリ会う。店内は華人客で一杯である。店主の華人は広東出身の40歳代で、香港に長らく住んでいて、流暢な英語を話す。パオテレ漁港でカニは見なかったので尋ねると、パンカジェネとボネへ仕入れを派遣して、生きたカニを運ぶという。パンカジェネの海岸はエビとボル（ミルクフィッシュ＝ボラのこと）の養殖池が古くからあるが、今、台湾と香港の商人が養殖池拡大と近代化に投資を始めている。曝気用水車をまわすだけでなく、造波施設を作ると、エビの生育期間が従来の半分の2カ月に短縮できるという。

4月4日

日本領事館の佐久間書記官を訪れ、海産物事情を聞く。

① 華僑が一手に扱う商品にアガルアガル、タツノオトシゴ、ハタ、フカヒレ、ナマコ、ボタン用の貝などがある。タツノオトシゴは香港へ輸出し、そこで白く漂泊したものを再びウジュンパンダンへ戻して何かの加工をし、香港へ送り返す。漢方薬であるという。ハタは従来は開いて干魚にしていたが、香港で白蒸料理の需要が急増し、華人が沖合で生魚を集荷し、魚市場は通さず直接生簀船で香港へ運んでいる。フカヒレ、ナマコは従来から華僑の集荷ルートがあり、これも魚市場は通さず、漁師と商人の直接ルートがある。華僑と漁師

の関係は、漁船、網、釣針、生活費などの貸与関係があり、漁師は獲物を全て貸方の華僑に渡す。最近ではトビウオの卵で同じ事が起こっている。

② 魚市場はパオテレとラジャワリ通りにある。ラジャワリ市場は売り買い共にだれでも参加出来る。パオテレ漁港には世銀の融資で冷凍庫が出来た。パオテレに上った魚は仲買人が買って中央市場やその他の魚市の商人に売る。

③ イワシはパオテレ漁港へ殆ど出ない。ジャヤンティ・グループの水産部門がマグロ漁用の餌に買い付け、ウジュンパンダンとクンダリに設置した冷凍庫に貯蔵している。

④ 大きな水産会社は外に MIKASE, BOSOWA, ハジ・カラの会社の水産部門がある。MIKASE は徳島水産と日綿と陸軍の合併企業、BOSOWA はボネ、ソッペン、ワジョの略称で、タクシー、エビ、土木などの多角経営会社、社長は県庁の経済開発局を辞めて会社を作った。ハジ・カラは父の代にはボネの米をウジュンパンダンに売っていた。彼の代に米の陸送を始め、それからトラック、バス、船に仕事を掛け、トヨタのディーラーになった。今は建築、土木、飛行機の蛇腹型乗降通路製作まで手がけている。南スラウェシの商工会議所会頭である。その会社の水産部門がエビ集荷をやっている。プリブミの企業家が出現している様子があるのだ。

⑤ エビ輸出が増大して養殖池のエビの取り合いになった。小さな業者は集荷が難しくなる。そこで数年前にエビ輸出業者の組合が作られ、集荷の地域割りを試みた。会社が生産業者の保証をし、銀行の融資を斡旋する方法だ。しかし集荷人が暗躍をし、値の良い会社が結局エビを集めてしまう。今はエビ集荷について戦国時代である。ルー島のサゴヤシ地帯もどんどんエビ池に変わっている。

⑥ 真珠養殖は今まではなかったが、ケンダリとブトンに日本人会社とドボから移動してきた中国人の会社が生まれた。しかし、海軍、警察、漁民の間の組織を通して、養殖場から消えた真珠がウジュンパンダンの町に出回っている。

⑦ ハサヌディン大学にハルママッパ氏という漁業研究家がいる。東大の海洋研で学位をとった人である。漁師を組織して漁獲物を日系水産会社へ直接売る計画を練ったが、失敗した。企業は安定

集荷、画一サイズを求めるので地元漁師は対応できない。華僑はその点柔軟で、何でも、少量でも買い集めるので、結局、華僑に売ることになる。

⑧ 貧困撲滅運動が始まった。各州の村の十数パーセントを貧困村と認定し、貧困の原因を発見し、貧困の撲滅対策を見つけだすという運動だ。JICA がそれに一役買っている。バル県にパイロット村を設定し、JICA の専門家が BAPPEDA (地方開発庁) に入り込んで活動することになった。貧困村と認定された村の住民はどんな気持ちを抱くでしょうか、と佐久間氏が問う。

養殖池開発、水産会社の急激な増加、貧困撲滅運動と事態が急進展していることはよく判った。長期的展望はどうなのだろうか。ともかく廻転すれば良いのだということのようである。それにしても1980年の調査の時はこんな調査は思いもしなかった。私自身も大変化してしまっているのである。

午後、ヤコブ・マリカールの兄さんに会う。ソ نباオプー通りで以前は小さな薬局を開いていたが今は店を閉じている。マリカールさんには逢えなかったが、兄さんによると、先祖はマドラスからの移民で、最初アチェへ入り、その後代にバリ、アンボンと移動し、3代前にウジュンパンダンへ移住した。今7代目である。インドネシアの沿岸都市は何処もそうだが、随分いろいろな出自の人がいる。

4月5日

日本人網元

朝、ウィサタ・インで伊藤氏と朝食中に突然日本人が我々のテーブルへ来る。何かと聞くと、丈夫な漁船はどこで入手できますかという質問である。いぶかしがっていると自己紹介を始めた。この人は山口県湯屋の進藤さんといい、湯屋と松浦半島にカツオブシ工場を持つ。ここ数年、原発の温水でカツオ漁が減った。そんなことあるのかと思ひながら続きを聞く。インドネシア政府要人の紹介でジャワに工場を作ったが乗っ取られてしまった。ハジ・カラ関係者の紹介で数年前、トミニ湾のバリギとアンパナにカツオブシ工場を作った。アンパナには冷凍庫も設け、そこを基地にするつもりである。地元の漁師を雇い、10隻のカツオ船で操業しているのだが、2～3年で船に穴が

あく。どこかいい造船所を知らないか、という話である。ブルクンバのピラへいきなさいと、ともかく返事をしたが、呆氣にとられて、それ以上詳しい話を聞くのを失念したのは残念だった。

呆氣にとられたのはその勇敢さにである。大学や官庁の人間など及びもしない高みをスイと飛ぶエネルギーがある。華僑のみならず、日本人個人企業家は大したものだ。そういえば4月1日に出会ったトラジャコーヒー会社の大原さんもそうだ。東食とKey コーヒー会社合併で経営するコーヒー園がランテパオの北にある由で、大原さんは東食から1976年に出向し、以来スラウェシ暮らしだという。個人レベルの異文化接触が理屈ばかりこねている大学人を置き去りにして進んでいる。それにしてもその実態を調査しようという大学人の少ないことはどうなっているのだろうか。

II 南スラウェシ西岸

ハサスディン大学のアグネス女史（今回の計画の現地側マネジャー）に紹介して貰って農学部の特ナケイサリ氏と今日から西岸の調査に出る。彼の祖先も9代前に広東から移住した華人である。マロスを過ぎて、一面の平野に灌漑水田が広がる。サンカラック河の支流が東の石灰岩山地から蛇行して流れ、汽水湿地と後背湿地が入り交じる。後背湿地は水田だが、汽水湿地はニッパが所々に群がり、養殖池に変わっている。パンカジェネで昼食をする。養殖ボラのブツ切り網焼きだ。ライムの搾り汁でチョトに味をつける。久しぶりの味である。

ラバッカンの沿岸漁村

更に北へ走って東から延びた石灰岩の残丘を過ぎ、ラバッカで左折し、まっすぐ西へ走り、海岸に突き当たる。この辺りは隆起珊瑚礁の上に薄い貝層と砂、その上に汽水泥が堆積している極めて新しい陸化マングローブである。掘り上げた土にはベトトリと黄色い膜が浮く。海岸には僅かにマングローブが立つ。村はマングローブを伐って珊瑚の岩を積み、造成した土地に高床家を立てたブギス人集落である。その一軒に上がりこんで聞く。パンカジェネ県ラバッカ郡プナタバジ村

① 沿岸漁業は、以前は巻網が主体だった。集魚

灯装備の小舟2隻が点灯し、魚を集める。巻網船ガエは長さ13m程の機動船で10人乗り組んだ。今は5月から10月に行うバガン漁が主である。定置バガンでなくて船にバガンを乗せたものである。四手網をウィンチで降ろし、水銀ランプ40個を点灯して魚を集め、四手網を捲き上げる。獲物はルレとマイロ（どちらもチリメンジャコ材料）である。バガンの建造は4,000万ルピアかかるが、耐用年限10年で、毎年2,000万ルピアの水揚げがあるので、設備コストは数年で償却可である。収益は折半し、半分はバガンの所有者がとり、半分は漁師で分配する。仲買人がウジュンパンダンは勿論、ピンランやソッペンからも買いに来る。他にトロールでナマコを獲る。これにはガエ船を使う。年中収穫があるのがよい。天日で干したものをブギス人仲買が集め、ウジュンパンダンの中国人に売る。

② エビ用養殖池は少し南のモンチョンボリの潮が入る湿地帯に広い。ここはむしろ水田地帯だったが、ここ3年来、水田の養殖池への転換が進んでいる。稚エビはパレパレ近くの孵化業者から買い、池に入れて4カ月後に収穫する。

この辺りの海は遠浅である。海中をゆっくりと歩いている漁師は三角網ソドを押している。パロナン（アオブダイの類）やティタンを捕るという。

水田を転換した養殖池

国道へ戻って15km北上すると海岸平野は狭まり、右に低い山地が迫る。海岸平野は養殖池が水田とモザイク状にある。所々孵化場からの稚エビ分配所がある。緑っぱい水をたたえた養殖池で話を聞く。バルへ36km道標地点である。

① 30年前までは水田地帯だったが、塩水侵入と排水不良で低収田だったので養殖池に変えた。しかし幹線水路がないので、養殖池としても条件はよくない。潮汐水を海から順次1枚1枚引き入れていく。同一の池にボラとエビを飼い、両者の比率は塩分濃度による。塩分が高いとボラを増やし、淡いとエビを増やす。池の中でエビは底を泳ぎ、ボラは表面に集まる。

② エビは5、6月と11、12月の2回収穫、ボラは11月、12月に1回収穫する。収穫後、池を干し、サポネンで消毒し、乾いたところで肥料を撒く。ヘクタール当たり三リン酸が800kg、尿素が100

kg である。そして潮汐水を入れる。

③ エビは SASKO, MIKASE, CAM などの会社から集荷人が買いに来る。ボラは市場へ売る。

④ エビは成熟すると池の周囲へ寄るので竹柵を岸から直角に設けてその末端に網を仕掛けて捕る。

バル辺りで日が落ちてしまい、パレパレまでの途中、海上に点々と漁り火が見える。

4月6日

パレパレ南の漁村地帯と船作り

パレパレの町は14年前と余り変わっていない。昨晚通過した南の海岸へ戻る。南スラウェシ西岸はバルからパレパレまで、山が迫って海岸線は屈曲し、珊瑚礁多島海となって、漁業地帯の景色になる。20 km ばかり南下して、ピニシ船を修理中の浜でとまる。

バル県マルセタシ郡クパ村

朝早く漁に出ていたアウトリigger船がぼつぼつと漁をもって帰り、女や子供が海中でバケツに魚を移している。この辺りは水田は少ないので、魚を売って米を買う。米と魚が主食である。漁師の一人に聞く。

① 村人はそれぞれ家族か親密な友人仲間だけで漁に出る。刺網を張る場所や釣場も各自独特の知識で、他人に喋ることはない。漁はエンジン付き

のアウトリiggerで30分程走った沖で行う。刺し網を20 mの深さに350 m程の長さで張り、延縄もよく使うという。浜近くの海には種々の網が設置されている。バンロンは水深10 mまでのオフショアに水面上10 mもの高い櫓を立てて見張り台を作り、そのすぐ前に四手網に似た三角網を仕掛け、竹の止め木で網を沈んだ状態に保つ。魚が泳ぎ込んで来るのが上から見えると、見張り人はロープを引いて止め木を外し、網は中空に跳ね上がる仕掛けだ。

② バガン・タナムは固定したバガンで、竹足場を作り、上に10 m四方の台を設ける。夜、台の下に四手網を沈め、ランプを点灯して魚が集まるとウィンチで網を引き上げる。漁はマイロ、ルレ(シラス、キビナゴの類)が主で、生のまま、あるいは乾かしてパレパレの市場へ売る。漁師は時に生のマイロにライムの汁をかけて食う。

③ 浜で建造中のプラフは70トン、甲板高が4 m、船長は竜骨部で18 m、甲板が29 m、1本マストのスクーター船で、ランボという。クラブ(ハタの類)の漁に使う。

丁度、注文主の水産会社から人が来て船大工の棟梁と何事か相談中である。サロンを巻いた縮れ毛の棟梁はブルクンバのビラから出作りに来ている。その言うところでは船の写真か絵さえあればどんな船でも作れる。棟梁は注文を受けると、材木と板、木釘、作業日数の必要量を計算し、労賃と利益を加えて、値段を注文主に示す。契約が結ばれると値段の変更は出来ないで、計算が正確でないと棟梁が損を負うことになる。

今、建造中のランボの場合、彼はビラから8人の人夫を呼び集め、10カ月働いて、船殻は完成した。船殻は三層から成っている。最外側は板を合わせ釘で接合し、それに肋骨の筋材を打ちつけ、最内側は肋骨に間を空けて板を張る。竜骨と板は鉄木の材を使い、肋骨材はチークを使っている。あと3カ月で甲板張りとかabin作りが完成する。棟梁の提示した価格は5,000万ルピアである。但し、これはエンジンは含まない。

更に南下すると長い浜にアウトリigger・バガンが並び、浜堤に長い漁師村がある。ここでとまる。



写真3 西岸のバルーパレパレ間は珊瑚礁海岸となり、大小の漁村が多い。どこも浜に直接漁船を着けるひなびた風景である。

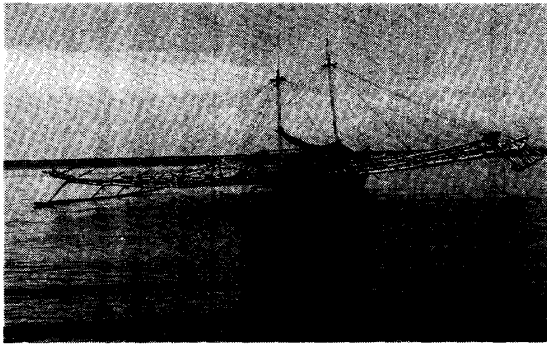


写真4 両アウトリガー・カヌーが翼を広げた形の移動バガン。

バル県マルセタシ郡マラワ分村

アウトリガー・バガンは3トン程の小舟の上に竹で組んだ8m四方形の台を乗せ、左右両端にアウトリガーをつけた恰好である。ラバッカンのものより少し小振りである。この移動バガンに5人が乗り組み、浜から1時間半オフショアへ夕方に出漁し、朝、港に帰る。漁の方法は先述のものと同じで海面下15mに四手網を下ろし、集魚灯を点灯して魚群をとらえ、ウィンチで巻き上げる。獲物はルレ、マイロ、ガッポ（フエフキダイの類）、チャカラン（カツオ）、イカが主である。ハタは延縄でとる。漁の終わった頃を見計らって仲買人が海上をバガンへ氷を積んできて、獲物を買って取っていく。

漁期は東南モンスーン季、つまり乾季である。水田が少しあり、西北モンスーン季には水田を耕作する。

更に南下してバルの北22.5km地点でとまり、造船所を見る。

バル県ソッペン・リアガ郡シッド村

隆起珊瑚礁で囲まれた小さな湾奥の浜で数隻のプラフを建造している。主人のアブドゥル・ラティフさんに聞く。

① 元々の仕事はバル郡オランゲから東カリマンタンのボンタン（石油基地がある）へ、ランボ船を運航し、米100トンの外に100人ばかりの乗客を運ぶことだった。その内に船の需要が増えてきたので、東カリマンタンのウリン（鉄木）を利用した造船業と材木業を手がけ始めた。ウリンはボンタンのブギス商人が15cm角材と20cm幅の板に

既に製材したものを買う。

② 巻網を操業するガエ船4隻も持つ。漁場はマカッサル海峡で、バニヤラ、カトンボ（共にアジの類）、チャカランなどで、バレバレの市場で売る。今、ロンボン（魚礁）を設置した柴漬け漁を計画している。100万ルピアの投資が必要だが、仲間を作ることは考えていない。

③ ボンタンから運ぶ鉄木は一部を材木商に売り、残りは造船に使う。造船注文を受けると、ピラから船大工を呼び、彼の家に寝泊まりさせて船を造らせる。造船用道具は何処でも同じ簡単なもので、ドリル、斧、手鋸、ノミと板を挟むジャッキだけ、船大工は図面も何もなく経験と勘で優美なカーブを見せるプラフを作る。70トンの船作りには鉄木60立方メートルを必要とする。進水時には卵を割り、シリーを船首に供える。

④ 外に水田を少しとボラの養殖池も持つ。ボラよりエビの方が収益は良いが、水車やポンプ、稚エビ槽用の酸素供給施設など、経費もかかる。

造船注文を受けた時に、額を取り決めるのはここも同じである。前の例でもそうだが、契約書など面倒くさいものはかわさない。全て口頭の約束である。信頼関係で生きる慣行のおかげで、能率の悪い事務部門など不要という利点がある。ラティフ氏の会社を日本で経営する場合だと、電話やファクシミリでやりとりをし、コンピューターで事務管理をし、契約書のやりとりを何度も行い、そのために事務員が何人も必要となり、大量の紙や資材、電力、それに時間を消費することになる。実質のみ尊重の姿勢がこうした一切の無駄を不要にしている。日本のみならず、先進国の何十万という会社や役所で行い、発展途上国にも押しつけようとしている莫大な無駄の体系、これは果たして進歩なのか退歩なのか。それにこの無駄の体系はどこの文化なのだろう。人間を信頼してはならないという性悪説を好むどこかの人間の性向だけが大きな顔をしているように思える。

道沿いにあるバス乗客相手の飯屋で昼食をとる。大音響で鳴る音楽はアラブ的メロディーである。我々の運転手の言うところでは、ブギス人がこの種のアラブ音楽を好むのだと。様々な人間と文化がやってきて混淆している。運転手の経歴を聞く

と、父親はメナド、母親はゴロンタロの出身で、奥さんはトラジャの女性、本人は運転手を始める迄の6年間、サバで森林伐採を行う日本の会社のキャンプで働いていた。人々は動き廻って生きているわけだ。

稚エビの孵化場

昼食後北上し、パレパレの南 16 km 地点で稚エビの孵化場を見る。

バル県シッド村ムティアラ・サムドゥラ社孵化場

① この孵化場は1987年に開設された。小さな事務所のほかには、室内の孵化池3槽、屋外に稚エビを育てる少し大きな水槽が3槽ばかりある。設立段階では台湾人技術者が居たが、今はタカラールの別の孵化場に移った。親エビはアチェ周辺のインド洋産が最も高価で、その他に南スラウェシ東岸から買う。親エビのつがいは 32°C に保った水槽におき、英、米、ベルギー、日本から輸入する飼料を与える。産卵前に 29°C の水槽に移す。産卵後の孵化した稚エビはこの温度に保ち、プランクトンで飼養する。25日の稚エビを酸素を吹き込んだ水袋へ移して売る。驚いたことに見えるか見えないかくらいの稚エビを小さな網で仕分け、一匹単位で値をつける。この小さな孵化場で生産する稚エビは年間1億匹であるという。

② この会社は稚えび孵化に特化している。同業会社は数多い。自前で孵化場、養殖池、処理工場、冷凍庫を揃えている会社は稀で、スラウェシ・アグロ・ウタマがその稀な例に過ぎない。ハサヌデイン大学水産学部出身の技師に札を言い、パレパレに向かう。

パレパレとその北の漁村地帯

パレパレ港

パレパレ港は貨物船埠頭と貨客船埠頭に分かれている。貨物船埠頭では7,000トンクラスの船が3隻、クレーンで米を積み込んでいる。サマリンドとスラバヤへ向かう。米はピンランとシドラップ産だという。

貨客船は100トン位の木造船が5隻停泊している。ピニシより細長い。米、バワンメラ、キャベツ、雑貨の外に人間を満載して、サマリンド、バリクパバンへ向かう。週2回、水曜と土曜に出発



写真5 パレパレと東カリマンタンを結ぶ連絡船。石油基地と木材会社が多い東カリマンタンへたくさんの人が出稼ぎに行く。

し、材木と人間を乗せて月曜と金曜に帰着する。東カリマンタンはボンタンとバリクパバンに石油、油化ガス基地があり、センガタに炭坑基地がある。マングローブを埋め立てて大きな工場がたくさん立ち並び、景気がよい。サマリンドの材木景気は下火になったが、それでも仕事の機会は多い。稼ぎを求めて南スラウェシから多くの人々が動いているのである。

パレパレの丘の下にあるホテルに泊まる。14年前と同じ建物である。夜、日本へ国際電話をする。14年前、やはりここで電話をした時は1時間以上待ったが、今回は直通である。変化を実感した。

4月7日

パレパレの魚市場

タンケイサリさんがパレパレの魚市場は見ておこうと言うので、町の北外れでとまる。市場入口で昨日のラティフさんにバッタリ会う。バケツに鮮魚を入れて売りに来ているのだ。市場の細長いバラックに様々な魚が並んでいる。入口から見ていく。ラヤン、カトンボ（共にアジの類）の燻製、ボラの1日干し、ガブス（タイワンドジョウ）、ラヤン（メアジの類）、トンコル（スマ＝サバ科）、ルレ（シラス）、60 cm 位の大きなキハダマグロ、モナ（ツバメウオの類）などの鮮魚、小さなキハダマグロの開き干し、トビウオの丸干し、チャカランの輪切りと開き干し、干しエビ、ハタ、イワシの塩干しなど。

魚市場の裏は岸壁で、漁船からどんどん魚が運び込まれて来る。大きなカツオやマグロは尾を括

り合わせて天秤棒にかけ、二人がかりで運ぶ。

岸壁と市場の間の広場は干物作りの竹の台が設けてあり、トンコルを半日干すとか、マグロの輪切りを竹ザルに入れて干すという具合で、乾季は忙しい空間である。岸壁に並ぶ船の中には、朝5時にマンダールを出発して機走してきた軽快な両アウトリigger・カヌーもいる。

柴漬け漁の一種

パレパレ北の湾、ピンラン道標 23~21 km

パレパレから北上するとすぐ左手に大きな湾が広がり、マングローブが岸に点在する。この湾は稚エビを捕集する仕掛けが多い。竹竿とマングローブ枝を海中に立ててロープを長く張り渡し、草を縛った紐を多数吊るしてある。草は海面から少し頭を出す位にする。エビがその草に卵を生む。孵化した頃を見計らって草をパッと持ち上げ、チリトリ型網で稚エビをすくう。柴漬け漁の変形だ。稚エビはすぐ売るか、海水と淡水を混ぜた自分の池で少し育てて売る。

対岸を見るとココヤシの繁る半島が長く南に伸びている。そこには近代的孵化場や養殖池が多いというので行ってみることにする。

ココヤシ地帯の漁村

先述の湾入を過ぎてスッパへ左折する。スッパは元々スッパ王国の所在地で、ポルトガル人がラジャと貴族達をキリスト教に改宗させたことで知られる。ピンラン平野の南西端を占め、水田が広い。半島西岸へ当たって浜堤のココヤシ園を南下する。浜から海に伸びたエリが多い。とまって聞く。

ピンラン県スッパ郡ウィリン村

① エリはベラといい竹とタマテ（マメ科の灌木）で組む。誘導柵を 100m のばし、先端は二重に簀を立てる。形は琵琶湖のエリに実によく似ている。組立費用は10万ルピアと安い。ベラの設置は漁師なら自由である。獲物はハタ、カトンボ、バロナン、イカが主となる。この海岸には定着バガンは勿論、移動バガンもない。外海に面して波が荒いからだという。

② 漁船はレパレパという両アウトリigger・カヌーが圧倒的に多い。後述するカティンティンと

違って船型は少し野暮ったい。船体はくりぬきカヌーに舷側板を足した形だ。専ら延縄で、カトンボ、トンコル、チャカラン、エコールクニン（タカサゴの類）をとる。トビウオ漁は刺網を使う。

③ 200m 沖に出るとナマコが多い。開いて水洗、煮沸後、天日で干す。

④ ブンレという三角網をカティンティンの両舷に装着して沖合いを海岸に平行に往復し、稚エビをすくう。三角形の頂点に長い袋網が付け加えてあり、稚エビはここへ入る。しかし稚エビ漁は下火になった。BOSOWA 社の孵化エビが遥かに安いからだ。

⑤ ムランタウに出かける地域は東カリマンタンが多い。1~2年滞在して伐採会社か漁業会社で働く。パレパレよりも職が多い。

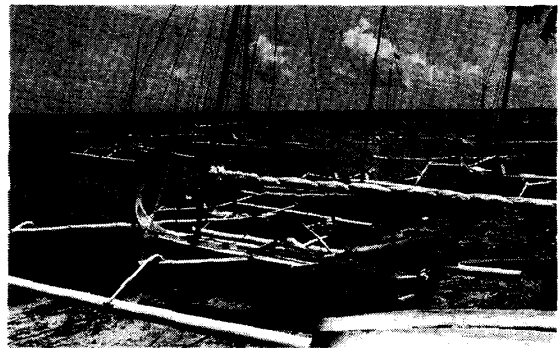


写真6 マンダール人の漁村。軽快、優美な両アウトリiggerでマカッサル海峡へ出漁する。

マンダール人の移動的漁村

パレパレ県スッパ郡ウジュン・レロ村

半島南端のウジュン・レロはマンダール人の漁村だ。ここを基地にしてあちこちに移住地を持っている。むき出しの浜堤にヤシの葉柄や竹、あり合わせの板などで作った粗末な家が長く続く。浜辺には1本マストに三角帆を張るカティンティンが林の如く並んでいる。船首と船尾は高く急角度で立ち上がる。軽快で優美なダブルアウトリigger・カヌーだ。船首と中央部に固定した腕木が両舷に突き出し、フロートに斜めに固定した接続用の連結支柱を脱着して、フロートをつけたり、外したりする。漁はカティンティンを使用し、エリはない。魚種はウィリン村と殆ど同様である。村には船大工も100

人ばかり居て、盛んにカティンティン作りを行っているが、マムジュで作られたものも盛んに輸入する。マムジュではこの優美なディンギの値がわずか30万ルピアだという。15m 長のカップル（キャビン付きの船を指す）でも300万ルピアという安さだ。カティンティンは日本に輸入すればヨットなどより大流行するだろうなと思ってしまう。

近代的エビ産業

ピンラン県スッパ郡シンド養殖会社

ウジュン・レロから半島を北へ戻り、ウィリン村を過ぎたところに近代的養殖池が広い。SINDOという会社の所有である。これを見る。

① 元の水田地帯を全面掘削して池を作り、6年前にエビ養殖を始めた。全面積は30ヘクタール、1つの池は4,000平方メートル、それぞれに4台の水車を設け、曝気をする。稚エビは孵化会社から買い、平方メートル当たり35匹の割で飼う。年2回収穫で、1回の収穫はヘクタール当たり3トンである。エビは輸出会社 SASKO に売る。

② 危険なヴィールス病インサン・メラーが前回の収穫時に出現した。その池は今干して嚴重に消毒をしている。インサン・メラーはランガ地区から拡散している。

近くには BOSOWA 社の孵化場、KENCANA 社の孵化場と養殖池もあり、近代的エビ産業の中心地だ。

国道へ戻ってピンランへ北上する。平坦な大水田地帯で、二作目が始まった水田は移植だけでなく、散播も広い。ピンランの町の南で左折し、海岸へ向かう。

ラジャとマンダール人漁師

ピンラン県マツト・ソムベ郡ランガ村

ランガは元のランガ王国の所在地だ。海岸平野の西端、ラグーン東側の浜堤一帯にある村がその本村である。ラジャの末裔ナツィール・マッパ氏はタンケイサリさんの知人で、今晚はその大きな高床家に泊めてもらう。客間の吹き抜けバルコニーから見下ろすと、ラグーンは全て養殖池に変わっている。そこに1990年にヴィールス病インサン・メラー（クナンクナンともいう）が発生した。

全部で15ヘクタールの養殖池に大被害が発生した。水の pH が 4.5 と異常な酸性で、それと病気と関係あるだろうかと問われるのだが、こちらは全く知識がない。

マッパ氏の案内でラグーン西側の浜堤にある漁村へ行く。

① 漁村の住民はマジェネから移住してくるマンダール漁民とウジュンパンダン南のタカラールからのやはり移住漁民である。浜堤は伝統的にランガのラジャの土地なので、これらの移住漁民はいわば不法居住者である。だからマッパ氏に最大限の敬意を表す。タンケイサリさんによると昔のラジャは不法居住者にどんな命令、例えば殺人でも命令しえたそうである。

② 漁民達の生計はブンレ（三角網）で捕集する稚エビ、定置バガンでとるイカ、レパレバに似たソッペというアウトリッガーカヌーによる延縄漁の獲物のカトンボ、チャカラン、パレアン（マグロの類）だ。ソッペで刺網も使う。漁期は東風季で、西風季は波が高く、ときどき出漁する程度だ。浜近くで今しもブンレを押す光景がある。ここのブンレは広く開いた腕木を結束するところと、その手前でカーブした網の間に空間がある。その空間に頭を突っ込んで首の背後で腕木を保持して押す。ナマコとサメは多いが、漁をする者はいない。

③ 漁師達は金がないのでバガンや刺網を持ちたくても持てない、家は粗末なままだと不平は言うのだが、延縄にかかった獲物をソッペ船に引き寄せる時の快感は何にも替え難いともいう。倒れたランプでソッペが燃えそうになっても、少し待てよとうっちゃっておいて、獲物を手繰り寄せる手をはなせない。その時は妻も子も、借金も家の破れも忘れてしまうのだと。

④ ラジャ末裔のマッパ氏は貧しい漁師を冷たく見る。金がないのは怠惰のせいで、働く気があれば、ブンレ押しに精を出せばいい。1回押せば稚エビが400匹はとれ、6,000ルピアになる。養殖池を数年借りれば本村の方に家を建てる金はすぐ入るのだと。事実そうして不法占拠を脱し、本村に家を建てて移り住んだ例は多いそうである。

両者の話は開放空間である海域世界の伝統を生き生きと伝えている。ラジャの王国の盛衰と漁民の移動は密接に関連していたに違いない。景気の

良いラジャはたくさんの漁民を受け入れ、漁獲や交易、時には海賊業と戦闘で勢力を伸ばす。人望がなく景気も悪いラジャは活動度を低く抑えざるをえない。要するにラジャの甲斐性と漁民の集散と、習慣村つまり王国本陣は密接に関連し、その中で様々なラジャが盛衰を示したことなのだろう。

4月8日

ピンラン

エビの仲買人

朝、マッパ氏の家を辞して、ピンランの町へ走り、土鍋で炊いたチョト・マカッサルを食う。ヤギの脳がたくさん入っていて旨い。濁流の水位がまだ高いサッダン川を越え、ペッカバタで枝道を左折し、河口近いパリア村へ行く。パリア村近辺は湿地帯が広がったが、今は広大な養殖池地帯に変貌している。したがってエビの仲買人が多数活躍している。私達はパリア村の5人の仲買人の一人に会うことにした。その男は40歳代半ばのよく肥えた活動的な人物である。1971年から今の商売を始めたという。河口近くの彼の事務所まで話を聞く。

① パリア村周辺の養殖池はまだ伝統的方法で、しかし年に3回水揚げをする。雨季は洪水の危険が大きく、そうなるとエビは海へ逃げる。エビ生産は4～5月がピークで、乾季に入ると塩水濃度が上がり、生産は落ちるといふ。それでも毎日1トンは集荷可能であるという。

② 冷凍会社はたくさんあり、買値の一番良い会社をその都度選ぶ。今まで交渉のあった会社は SA-SUKO, MIKASE, WAHYU, MARKO, BONEKOM, BOSOWA, PRIMES, SITO MAS, CAM, SAV, TAS である。今年はジャワが洪水害で、これまで経験のない高値だ。例えば昨年 MIKASE の買値は kg 当たり24,000ルピアだったが、今年は3万ルピアだ。売買1kgにつき5,000ルピアのマージンが入ると、肥った腹を揺すって大笑いをした。

③ ピンラン最大の養殖池所有者は、ハジ・アンチェ。県庁の役人だったが、金を貸し、返金できないと池を取り上げる方法で、今や500ヘクタールの池を持つという。

サッダン川河口近くの水路には、レパレパやカティンティンが三角網を装着して密集している。海のエビが入荷されるのを見ると桜色で健康そう。

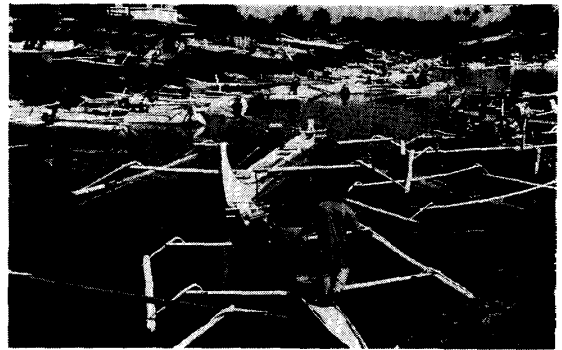


写真7 サッダン川河口近くの漁港はエビ漁に賑わう。三角網を装着したアウトリッガーはエビの稚魚をすくう。

一方、池のエビは灰色である。自然は偉大だが、人間の強欲にいつまで耐えられるのか。カモメが舞い降りて水の中に突っ込み、魚を銜えて飛び去る姿を見ながら、そう思った。

マンダール湾

ポレワリの漁村地帯とサメ漁師

国道に戻ってポレワリへ向かう。カマリを過ぎると再び山が迫り、細い海岸平野を走る道は次第に西へ回る。ポレワリへ15km付近から海上は珊瑚礁多島海となり、海岸線は屈曲する。稚エビとりの女達が増える。とまって聞く。

ボルマス県ポレワリ郡ビヌアン村

浜から海へ稚エビとりの柴漬け台が何列も突き出している。但し、ここではバナナの幹を立て、ココヤシの葉を漬けている。いかにもポレワリらしい。

① この湾は小さいので、柴漬け列は1家族5列に限られている。定置バガンは相当沖合いまで15基程見える。ルレ、マイロが主な獲物であるという。

② 湾に2隻のガエ船が停泊している。ウジュンパングン近くのサナネ島から毎年来る船で、2～3か月この港を基地にこの村の若者を作業員に雇って近海で巻網漁を行う。村に税金も払っている。

③ 緑の三角網で稚エビすくいをしたり、赤貝をとる中年女や子供を見ていると、ガッシリした漁師が寄ってきて、家に来いという。高床家に上がり込むと、干しナマコとフカヒレを見せる。トゥリパン・コロというナマコは5～7mの海底に潜水して採集し、白いナマコはトロール網でとるのだという。干しナマコはカビつけ迄終えて MAR-

KO に売る。kg 当たり 2 万ルピアである。

サメ漁は自分でナイロン糸から作った刺網で行う。目は 25 cm と粗い。西北風の季節、夜の浜から数時間走ったところで刺網を 70 ドゥパ (約 130 m) の深さに張る。少し深すぎる感じがするが、そうだ深く張るのだと頑張る。1 帖の網は 100 m で、5 帖連結する。数時間後に引き上げると、普通 5 頭のサメがかかっている。サメの体重は 10 kg から 100 kg まで相当変異があるが、1 頭から 4 枚揃いのフカヒレ (サヤップ) がとれる。網をもっと大規模にすれば、サメはいくらでもとれるから金を貸せ、銀行は融資に様々な規制をかけていて駄目だというのが彼の話の眼目である。

それはともかく、もう少し聞くと、引き上げたサメは網の中で死んでいる。朝、浜に帰って、フカヒレを切り、吊るして水を抜き、風と天日で干す。1 ~ 2 週間で乾燥が完了する。フカヒレは MARKO へ売る。肉は塩漬けにしたり、焼いてやはり MARKO へ売る。

話が終わると長さ 60 cm の長い尾鰭と細身の背鰭を見せてくれた。これは多分サカタザメ科のエイのフカヒレ。話の中で出てきた 4 枚一揃はシュモクザメのことと思われるので、2 種類のフカヒレの話が混線しているかもしれない。東風季は東カリマンタンのボンタンやコタバル迄行くともいう。船主ではなくて雇われの乗組員だが、ノウハウを身につけて独り立ちしたい気持ちがわいてきた段階と見た。

ボレワリの町で浜風が吹き通るホテルに一室をとり、昼食に行く。町は眠ったように静かである。飯はさすがに海の幸が出る。魚のおぼろに、イカン・ゴゴスといってキビナゴをほぐし、プリンビン、コショウの粒、サンタンを加えてバナナの葉に包み焼いた料理、やはり包んで焼いたものにカツオ味の魚の削身に玉葱、サンタン、ライム片を加えたオタク・オタク。生のナマコの薄切りにゴマ粒、プリンビン、ミカンの葉を混ぜてサンタンをかけたものなど、どれも旨い。

ボレワリ平野は 13 年前と殆ど変わらない印象で、マングローブ地帯の養殖池は相変わらず今造成中の感じが強いし、水田地帯はやはりサゴの林があちこちに残っていて、ピンランの水田地帯とは景

色が全く違う。低い丘陵にカカオが増えている位が変化だ。何となくとりどめのない、通過型土地利用の景色が続く。平野を過ぎると再び山が迫り、道は海岸沿いに行く。

マジェネ湾

マンダール人の大漁村

マジェネの町を突っ切りマジェネ湾の西端の岬へ行く。マンダール人の漁村を見ようと、マジェネの町から西へ 3 km 地点を海岸へ下る。

マジェネ県バンガイ郡トリ村

珊瑚礁の白い浜堤に長く伸びた漁村である。ハイビスカス、デイゴとココヤシの木陰にヤシの葉で屋根を葺いた低い高床家が並んでいる。前面は広潤な湾に透き通った珊瑚海が広がっていて、とらわれない自由な漁民マンダール人の心を絵にした感がある。

① 浜辺に並ぶアウトリiggerはサンデックといい、カティンティンとよく似て立ち上がった船首と船尾をもち、くり抜きカヌーの上に 3 枚の板を積み上げている。少し違う点は船首の立ち上がりが前後対称で前進後進どちらも可能な船形をとどめている。幅 60 cm 長さ 10 m の細長い優美なダブルアウトリiggerカヌーである。甲板が張っており、魚を入れる蓋つきピットと人の入れる開放ピットが切られている。三角帆以外に小さいディーゼルエンジンを積む。

② 東風季が主な漁季でマカッサル海峡へ出漁し、トビウオ漁を行う。岬を回ってスダナ迄北上し、西のマカッサル海峡へ走る。出漁時は 100 隻程のサンデックの船団を組み、1 隻には 4 人が乗り組む。それぞれ 500 kg の塩と 100 kg の米、20 リットルの水タンクを 10 個積む。どうしてそれだけ多量の米と水と塩が要るのかと聞くと、海上で 2、3 カ月漁を続け、とれたトビウオを塩漬けにするからである。トビウオの卵はすぐ干す。寝る場所はサンデックの狭い空間である。甲板の下へ潜り込んでイワシのように折り重なって寝るのだと。

③ トビウオは刺網でとり、すぐ塩をふって洋上で干し、蓄える。塩干ホシウオが 1 トンに達すると、東カリマンタンのボンタンで売り、一部を持って帰る。

出漁中、延縄も流し、トンコル、カトンボ、バ

ロナンを釣る。サメがかかることもあるが、サメ釣りには専用の大きな針を使う。延縄で釣り上げた魚が生きていると生簀に入れておき、海上をボートで来る仲買人に売る。

チャカランとトンコル釣りにはラヤンラヤンという罠を使うことがある。竿の先に3mの紐で罠をつけ、海上すれすれに曳く。そうすると水鳥が小魚を追っているのだと魚が勘違いをして寄ってきて、罠の下につけたイカ型の擬似針に引っかかる。針にはもどりがつけてある。その形からこの擬似針はチュミチュミという。

④ 湾内には例のバンロンという跳ね上げ三角網がたくさん見える。水深5m位が丁度良い。これは主にトンコルをとる。バンロン漁の盛期は西風季つまり雨季である。マジェネ湾は東南向きなので、東風季は波が高く荒れて不漁となる。

⑤ 浜近くでは女や子供達が稚エビやボラの稚魚とりをやっている。バナナの葉を長い紐に結びつけて、時計回りにこれを曳いて歩き、次第に輪を絞っていき、最後に小さな三角のタモですくう。乾季、殊に5月は良い収穫がある。

⑥ 村の主食はバナナとココヤシスライスをバナナの葉で包み、蒸し焼きしたもの、それに焼き魚だった。今は米が増えている。家の周りに40cm程の大きな牡蛎殻がたくさん散らばっている。漁村では食べるが、売ることはないという。そういえば、透明な浜近くの海中に黒いウニもたくさんいる。あれは食べないのかと尋ねると、食べないという。インドネシア語ではブル・バビつまり豚の毛で、いかにも蔑視的な感じがある。この辺りではマカッサル語でガランダンという。生ウニは旨いぞと言ってもバカにした顔をするだけだ。食習慣が随分違う。卵が少ないとか、毒でもあるのかもしれない。

4月9日

ボレワリ港と漁村

ボレワリの港は、小さなピアが1つあり、岸壁も短く、自然の砂浜が長い。砂浜の浜堤に漁村が続く。高床の下は竹の簀圍いの空間で、どの家もトビウオの塩干しを積んでいる。仲買人のセメント床には山のように塩干トビウオが積まれている。

① 店で見るとトビウオの干物がkg当たり800ル

ピア、塩干が600ルピアである。トビウオ漁は5月がピークで、ボレワリ港から200隻程マカッサル海峡へ出漁し、4月から7月の期間は専らトビウオが商いの中心であるという。ウジュンパンダンへも売るが、むしろタナトラジャヤママサ（ルー県）の山地へ売る分が多い。

② 漁師の家には細い割竹で作った筓が転がっている。昔の米俵を少し小振りにしたくらいのサイズである。両端は車軸状に竹ヒゴを配列し、中心へ向かって窪ませる。竹ヒゴは中心ほど細くし先端は尖る。パッカジャと言ってトビウオの卵とりを使うのだと言う。使用時、竹ヒゴが見えないくらいバナナの葉をヒゴの間に一杯挿し、数個をロープで括り合わせて海上に浮かべる。トビウオは葉に産卵に集まる。草に卵を生みつけたトビウオは海へ戻るが、両端の入口から暖簾を押し分けるようにして筓に入ったトビウオは中で産卵する。トビウオの卵は船上で干す。日本の寿司屋に出回っているトビタマである。トビタマの仲買価格は黄金色の一級品がkg当たり2万ないし3万ルピアでトビウオよりはるかに高い。赤い二級品は少し安い。

③ 刺網でサメ漁も行う。主目的はフカヒレで、ヒユ＝サメは2種類がある。ヒユ・ロンタルとヒユ・ピアサである。ヒユ・ロンタルはフカヒレとして売れるものが3枚とれ、ヒユ・ピアサは4枚とれる。ヒユ・ロンタルのフカヒレは白くて値がいい。1kg当たり3万ルピア前後で売れる。刺網を使うことや、3枚の鰭が使えるといった点からするとヒユ・ロンタルはサカタザメ科のエイのことを言っているのだろう。サメ漁は6月から8月がピークになる。サメの肉は塩漬けでもって帰るが浜の人間は食べない。タナ・トラジャヤ、ジャワ人入植者へ売る。

④ 漁船はソッペという両アウトリiggerカヌーで、くり抜きカヌーの上に舷側板を張ることは今迄のものと同様だ。フロートの支柱が船首と船尾から横に張り出してあり、連絡支柱が水平支柱に固定されている。その下端部でフロートを脱着する。ソングデッキより少し短く、ややずんぐりしている。船首と船尾は優美なカーブで立ち上がるが、カティンテンより反り上がりは低い。マンダール人の船大工が多数住みついてソッペ作りに従事する。

バル県オランゲの造船基地

ポレワリからウジュンパンダンへ帰る途中、バル県のオランゲに寄る。木材輸送と造船経営のラティフ氏がカリマンタンの鉄木はオランゲが陸揚げの中心になってきたと言っていたのを思い出したからである。

バル県オランゲ郡ウジュン村

国道から西は隆起珊瑚礁の丘をゴトゴトと行く。右の湾は干潮でタイダルフラットが露出し、支柱で支えたスクーターが10隻以上、コロの上に立っている。そこを通り過ぎてウジュンの村に着くと、小さな埠頭で丁度鉄木を陸揚げしているが、忙しくて相手にしてくれない。僅かに知り得たことは、オランゲ地区に鉄木輸入業者が10人居ること、南カリマンタンのコタバルから輸入することだけであった。先ほどのタイダルフラットに戻る。昼の最中だが3人の船大工が働いていて、少し聞き得た。

① 建造中と修理中と合わせて12隻のプラフが入っている。1本マストのプラフはランボ、ここではナデと言い、2本マストをピニシ。どちらもエンジンをつけるとカッパルと呼び慣わしている。竜骨にはチークがよい。柔軟で、珊瑚に当たっても裂けない。鉄木は当たると裂ける。船殻はチークでも鉄木でもよい。昔はチークが主要な船材だったが、チークがなくなったので鉄木が置き替わっている。

② これらのプラフは全て材木運搬船で、南カリマンタンのプラウラウト北端のコタバルへ直行し、鉄木を積んで帰る。東風季には3日でコタバル迄着くが、帰路はタッキングを繰り返すので半月かかる。西風季にはその反対になる。鉄木の用途は船材と建材である。この村では木材輸送に60隻のプラフが従事している。乗組員は家族と隣人で6人程のチームを組む。プラフの耐久性は手入れ如何で、今修理中の船は1959年進水だから35年使っているという。縫合船はあるかと聞くと、そんなものは知らない、小さなサンパンでも合わせ釘で舷側板を組み合わせるとのことだった。

ウジュンパンダンへの帰途、タンケイサリさんと話す。プラフ造船はビラの造船技術を中心にした大きな人間集団の纏まりがある。マカッサル海峡での漁もマンダール人の場合には村全体が船団を組むという大きな纏まりがある。しかし、他の地

域はプラフの運航、バガンやバンロン網、刺網や延縄の操業など、ごく小さな範囲で共同するだけで、むしろ一人一人独立に仕事をする傾向が強い。どうしてなのかという疑問である。答を期待しているわけではなくて、1週間ばかり見たことの整理である。元々マンダール人の漁師集団とビラの航海造船集団が占拠していた地域に農民が割り込んできて、いい加減な漁師が出現したと想像しているわけだ。あるいは、ラジャの小さな圏域がたぐさんあった頃から、それぞれに違うニッチェを探し出して他のラジャと別のことで勢力を作る為に、今と同様の構造だったのかもしれない。今はエビ養殖が整流作用を発揮しつつあるが、稚エビの確保や池の装置も伝統的なものから近代的なものまで様々な方法が共存している。そのうち1つの形に纏められるのか、ずっと共存状態が続くのか。伝統的方法も近代的方法もそれぞれに得失があって、どちらがいいとは決められないと思うのだが、今の流れは、近代的方法が幅を利かせている。かつての由緒正しいマンダール人漁村は貧困村に認定して、これではダメなのだと決めつける方が通りがいい。しかし、それは両刃の剣だ。延縄にかかった大魚を引き寄せる時にはカミさんも子供も貧しい家のことも忘れるわというハイスピリッツを消してしまうことになる。生活水準を少しばかり引き上げるために、ロウスピリッツ化を進めることになる。ともあれ、一色に染めようとするのは問題だ。

4月11日

今日はハサヌディン大学人類学科の若い講師ハムカ君がタカラールへ案内してくれる。途中、ウジュンパンダン南端の魚市場へ寄る。仲買人以外にたくさんの市民も魚買いにここへ来る。盛況だが実に汚い。土床に魚籠から魚と水が落ちて踏まれ、グチャグチャの臭い泥になっている。長靴でないと近づけない。台に鮮魚が並んでいるが、なおに汚染されて腐っているのじゃないかと思ってしまう。早々に退散する。

タカラールの近代的養殖池など

タカラール郡タカラール村

タカラールで西へ右折し、ワル並木を少し行くと、

タカラール港である。カッパルとアウトリッガーカヌーが数隻停泊している。以前は水田地帯末端に養殖池があったが、今はマングローブに養殖池が広大である。南スラウェシ南西部は乾燥が強く、干満も弱いので、池も水不足のために伝統的養殖池は年1回の収穫に甘んじていた。そこへ会社が割り込んできて、ニッパマングローブ地帯をどんどん開き土堰堤を立てて池を作っている。ポンプで海水を入れ、井戸で揚げた水とまぜて、年2回の養殖も行う近代的方式の池が増えている。

① そうした池の1つを訪れると曝気のための水車を輸入し、ジャワの大学の水産学士がその設置を指導している。学士に聞くと7月と11月の2回収穫の計画だそうである。伝統的方法ではヘクタール当たりエビ 100 kg の生産が近代的方法では5ないし10トンに増える筈だと大変な強気である。真新しい作業小屋の近くにネズミトリの如き金網カゴがある。尋ねると、エビ捕集時にこのカゴに電気を流しながら押して歩いて、電気ショックで仮死状態にするのだという。近代池に今グレードアップ中なのである。これ迄はセミ近代化池で操業しており、1回の収穫がヘクタール当たり2トンくらいであった。しかしインサン・ヒタム病が出現すると全滅、インサン・メラーの場合は4分の1に落ちた。そうした病気を近代化で乗り切ろうということである。今、池を干して石灰を撒いている。撒く前の水の pH は 3.5 から 5.5 だったというから、相当硫酸が土から出ていることが判る。

② タイダルフラットの浅海では漁村の住民がアガールアガールを養殖している。これはオゴノリである。浅い海に竹を立ててロープを張り渡し、それから紐を垂らして 15 cm 程のアガールアガールを縛っておく。満潮時には水面下 1.5 m くらい、干潮時には水面上に出る。こうして3、4週間すると、長さが2倍、重量で6倍になる。収穫時にまた「タネ」株を植え付けて、年中養殖が可能だという。天日に干したアガールアガールが kg 当たり600ルピアに売れるそうで、南海の豊かさに頼った気楽な栽培だ。14年前は浜堤の上の緑濃い漁師村と、干上がった水田だけが印象的だったが今や随分変わってしまった。

華人網元とトビタマ漁

国道へ戻り北上してガレッソンへ向かう。川跡の低地と低い段丘が交互に現れる。段丘の水田は高い畦をめぐらして水をため込む形で、既に刈り跡のみ。低地の水田は今実っている。グマティ川を渡って左折し、海岸に向かう。何回か旧浜堤の集落と堤間低地の水田を越えて海岸に出る。ガレッソンの大きな集落が浜堤に続く。

ガレッソン・スラタン村ドゥスン (字) バヨワ

砂浜にキャビン付きの機帆船が何百と並び、漁季を控えて修理作業中である。この船はトビウオ漁に使うパトラニ船だ。家は立派な高床が多い。



写真8 トビウオ漁のパトラニ船。華人網元の持船が多い。タカラールのガレッソン海岸。

① ここの多くの漁師はウジュンバンダンの華人ソンリ・バワとブンガワ・サウイ (親分子分関係) にあり、トビタマ漁に特化している。ソンリは100隻のパトラニ船を持ち、1隻に5人を乗り組ませる。5人のうち一人はジュラガン (漁撈長) だ。漁具はボレワリで見たと同じパッカジャ筌である。パトラニ船は15個のパッカジャと、米 200 kg、干魚、塩1トンを積んでマカッサル海峡へ出漁する。追い風では1日で漁場に着く。筌の竹ヒゴの間にココヤシの葉を大量に挿し、パッカジャ5個をロープで繋ぎ、錘りをつけて 2 m から 2.5 m 沈める。採集したトビタマは乾燥して貯蔵し、海上で1か月、漁を続ける。漁季は4月から9月がピークで、その間に4回出漁する。ガレッソン全体ではこうしたパトラニ船が2,000隻操業しているという。

② パトラニ船の経費は油、パッカジャ、乗組員

出漁中の米、砂糖、塩、タバコなど全てを船主のソンリが持つ。経費を粗収入から差し引いた利益はまず折半する。半分はソンリが取り、他の半分は更に折半し、漁撈長がその半分つまり利益の4分の1をとり、他の半分は4人の漁夫に分ける。漁夫の取り分は16分の1になる。

一人の漁撈長の推定によると、華人ソンリの持船の水揚げ量は一漁季に200トンに達するだろうという。1隻が1回の出漁で500kg水揚げすることになり、少し過大見積りるの感じもある。トビタマの浜価格はkg当たり25,000ないし45,000ルピアで変動するが、先ほどの漁獲量を前提に計算するとソンリの収益は数十億ルピアに上がり、漁撈長で年間500万、ヒラで100万ルピアを越えると見積られる。共存共栄であり、家の手入を少しずつでも進められるのはトビタマのお陰であるという。乗組員はトビウオ漁季の始めに、トビウオの霊をなだめる儀式を行うという。ニワトリを供犠し、パトラニ船にその血を注ぎ、餅米、菓子、バナナ型氷菓子を供えて、海上の安全と豊漁を祈るのである。

③ 独立漁夫も勿論居る。彼等はトビウオを刺網でとる外、サメ、カカップ（アカメの類）、スヌー（ハタの類）を延縄で釣り、またパッカジャでトビタマも集める。彼等の船はキャビンのないパトラニ船も多く、ソンリの持ち船に比べると居住性は悪いが、やはり1回出漁すると10日から1カ月に及ぶ。他に跳ね上げ三角網バンロンもある。

④ 水平線上に珊瑚礁の島プラウ・サターが見える。そこの住民はメガネと足ヒレをつけて素潜りでナマコをとる。

要するにここの漁民の多くは華人ラジャの水産会社の社員である。華人ラジャの先には香港、日本の巨大なトビタマ需要があるわけだ。

III 南スラウェシ南岸とスラヤール

4月12日

南スラウェシ南岸

チコアンのアラブ人渡来伝承

今日からハムカ君の同僚アンサール君が加わり、3人となる。南岸からスラヤール、東岸をまわり、更に東南スラウェシまでいく予定である。タカラー

ルを過ぎて数kmで右折し、珊瑚礁のガタゴト道を海岸へ向かい、アンサール君の生まれたチコアン村に寄る。5kmばかり進んで左（東）にチコアン川の河口が出る。珊瑚の丘から下りた辺りに村がある。ここは14年前にやはり来た覚えがある。アンサール君の説明によると、チコアンはモハマッドの誕生日を祝うお祭りが有名で、その日は南スラウェシ各地からたくさんの人が集まる。その祭は1639年にハドラマウトから来たウラマー、サイード・ジェラルディンに由来する。彼の奥さんはゴワの女で、アチェで結婚した。その後彼はチコアン川の河口に船で着いた後、ゴワの王に会おうとしたが、アラブのウラマーとは見てもらえず粗末な待遇を受けたので、怒ってここへ戻り、南岸一帯の指導者になった。ブトン島のスルタン・カイクムッディンからピニシをもらい、ピニシの造船所を作ったのだという。ジェラルディンの子孫はその因縁で、ブトン島の王家や貴族の娘と結婚してきた。造船業は今はビラへ移ったが、全インドネシアに拡散したピニシ作りの元祖はここだというわけである。しかし、河口近くに定置バガンが数基とバンロン網が1基仕掛けてあるくらいで、さびれた今の姿から、かつての栄光を忍ぶことは難しい。

延縄漁専門の漁村

国道へ戻って東へ走ると20km弱でアルの塩田地帯である。今は雨季の終わりで、雨水の溜まった塩田は未だ休業中だ。塩倉に人影はない。少し登ると火山扇状地の台地で、そこはパルミラヤシとアカシアの点在する畑である。下るとまた塩田である。そういう繰り返しが続く。浜に近づいても漁船は少ない。漁より畑が盛んな印象を受ける。畑はキマメとキャッサバが目立つ。また浜へ下る。ハマボウの木陰にカヌーがあり、荒れた海が見える。ここでとまる。

ジェネポントの西20km地点、パビリンガ村、字タウロサンベ

浜のカヌーはレパレパという。船首は短い立ち上がりがある。カヌーの長さは4~5mくらい、それより長いフロートが両側につく。連結支柱の下端でフロートの脱着をやる。両舷から張り出した支柱の上に竹を並べて作業空間を作っている。

優美さはないが、安定性を高めることが優先されている。昼寝をしていた男に聞く。

レバレパは二人で乗り、ラウエ（延縄）で釣る。別に10人から15人ほど乗り組む機帆船パレンゲがあり、これも延縄だ。小エビや小魚を針につけて延縄を流す。スヌー（ハタ）、カカップ・メラー（アカメの類）、カトンボ、スブラ（ヒラメ）、チャカラン（カツオ）、ティヌンブ、バニヤラ、ラヤン（いずれもアジの類）、ベテベテなどを釣る。ヒユ・ロンタルも釣る。夜に集魚灯を使ってソド（三角形の掬い網）で稚エビ、ボラの稚魚を掬いとる。日中はレレ（バナナの葉をつるした台）でボラの稚魚をとる。

トビウオ漁の漁村

ジェネポントを過ぎる。散播田の広い火山台地が続く。台地を下りると、黒っぽい砂浜になり、男達が仕事をしている。とまって見る。

バンタエン県ピサップ郡ポントスング村字タンガタンガ

① 浜に座った男達はトビウオ漁の刺網を編んでいる。刺網（ランラという）は1kmと長い。スラヤール島近くの漁場で4月から8月の乾季にこれを風と平行方向に引く。トビタマはとらない。船はジョロロといい、幅2.5m、長さ10mの幅広構造船でアウトリッガーではない。船首と船尾に尖った板を斜めに立てる。舷側に網を引き上げる竿台があり、立って作業をするので、広い船幅が要る。5人乗組でそのうち一人はジュラガン（漁撈長）である。夜出漁し、一晩で500kgとれば大漁、朝、帰港して塩をして売る。船はタナ・ベルから買う。1隻250万ルピアで10年は使えるというから立派なものだ。

② 稚魚とりもやるが、子供達が赤や青の三角網で掬ったり、バナナの葉を漬ける長い柵が数列海に突き出している程度である。

古い王国バンタエンの漁村

東へ走る。ロンボバツタン火山が近くなる。山麓の町バンタエンはナガラクルタガマにも名前が出る古い町だ。町中へ入ると華人の店が多いが静かなものだ。バンタエンを越えるとゆるい火山扇状地の裾を海が洗う形である。浜近くで三角網を

押す男たちや、ジョロロ舟が点々と海上に見える。静かな漁村地帯だ。とまって見る。

バンタエン県トンボブル郡バロンルー村字ウジュンカティンティン 133 km 道標地点

浜に並ぶずんぐりしたアウトリッガーカヌーはピセヤンという。5mの支柱が船首から斜め後方へ伸びた長さ10mの前方ブームを支え、大きな三角帆を張っている。東風季にこれで1時間走り、イカンバトゥ（スヌーのこと）、バニヤラ、チャカラン、イカンメラー（フエダイの類）、イカなどを刺網でとる。また曳き網でマイロやルレなどのジャコをとる。4月から7月の間はピセヤ船にブンレ（三角網）を装着してウダン・ムティアラ（エビ）やボラの稚魚を掬う。ブンレは底を浚えるので腕木先端にソリがつけてある。仲買は必ずしも華人ではなく、バンタエンやブルクンバのブギスも多いとのこと。

南岸はマングローブが殆どないので、養殖池は河口部にわずかに見る程度で、西岸と大分様子が違う。伝統的漁法で操業する独立漁師の地帯である。

少し東へ走るとブルクンバの町である。ロンボバツタン火山の扇状地の東南隅にある町で、だだっ広いがやはり静かである。中華料理屋へ晩飯を食いに行く。ウェイトレスはチーパオ風のドレスを着ている。

4月13日

ブルクンバの漁港

ブルクンバ港は町の西南角にある。長く突き出た砂州に小さなエスチュアリーが抱かれているところが港である。干潮で川底の青黒い泥が川幅の3分の1ばかり露出し、泥に坐る格好でランボ船とピセヤ船が数十隻停泊している。岸壁にたむろする漁師たちに聞く。

① ランボは数人のパトロンの持ち船で、1隻に漁師が5人乗り組む。特定のパトロンと親分子分関係にある漁師が多い。殆どが刺網を使い、刺網は目の大きさによって呼び名はいろいろである。6cmの粗い目の網はランラ、4cmのものはプカット、2.5cmのものがプカット・ハリマウあるいはレンゲという。漁が少ないと巻網にしても使う。獲物はトンコル、チャカラン、トゥンギリ（サワラの類）、ラヤン（ムロアジの類）、バニヤラ（ア

ジの類)、トビウオなどである。スラヤールや東南スラウェシへ氷をもって出漁し、魚は氷詰めにして持って帰り、鮮魚を売る。ボネやジュネポントの仲買人が買っていく。

② 独立漁師はジョロロやパジャラといった小さな船でトビウオ漁を行うものが多い。

③ ここから東のマングローブ地帯は養殖池が多く、元漁師でそちらに転向するものはバタニ・エンパン(養殖池農民の意)と呼ぶという。漁師達はいささか蔑視的な調子を込める。

タナ・レモのプラフ造船

東へ向かう。途中、タナ・レモからメッカ詣りに行く人たちが車を連ねて来るのに会う。50台ばかりの長い行列だ。やがてマングローブに掘った養殖池地帯になる。14年前は池だけだったが、今は水車で曝気をする池が多い。水田も広く、浜堤のココヤシの下に続く半農半漁村は豊かそうな感じである。

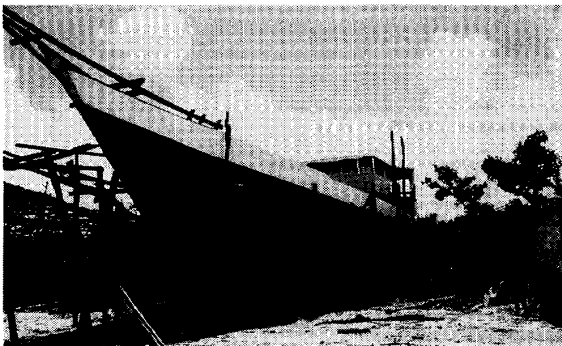


写真9 タナ・レモの造船村。全インドネシアの海域で活躍するプラフと船大工の中心。

ブルクンバ県ポントバハリ郡タナ・レモ村

タナ・レモに着く。ここは南スラウェシのピニシ造船の中心である。といっても木造船だからドックは不要で、緩く傾斜した浜辺にコロを敷き、船殻をたくさんの支柱で支えて、経験と勘だけで造るのである。

① この村は伝統プラフ産業組合(KOPINKRA)が注文を受ける。組合長のウスマン氏に会って聞く。組合は造船場をもつ棟梁(クパラ・トゥカン)が十数人、熟練した船大工134人が登録している。

船大工が実際の造船作業を指揮し、その指図で板を切ったり曲げたり、カンナをかけたり、ドリルで孔をあけたり、板を張ったり、ペンキを塗ったりする手伝いが多数働いている。手伝いは組合に登録していない。1造船場は年間ランボやピニシ10隻の造船能力を持っている。船大工は血統が大事で、血統が悪いと良いプラフは造れないという。絵か写真さえあれば500トンの木造船まで造れるそうである。

② 材木はキール用のウリン(鉄木)がコラカ(東南スラウェシ西岸)から、船殻材のビッティがマルクとスラヤールから、キャビン用のサップはカリマンタンから買う。材の値段は立方メートル当たりウリンが25万から30万ルピア、ビッティが30万から40万ルピアである。サップは安い。船殻はウリンを使うと船が重くなるので、軽くて強いビッティを使う。

③ 貨物船と漁船がこれまでの主な注文だったが、最近著しく増えているのは生簀を備えた生魚運搬船である。ハタを生簀でウジュンパンダンへ運び、そこから更に香港、スラバヤ、ジャカルタへ運ぶのである。

浜へ出て造船場を見る。

④ 際だって大きい木造船が完成に近い。キールの長さが17m、甲板部が21m、甲板までの高さ3.5m、幅が7.5mの大船である。これは250トンの貨物船でウジュンパンダンの華人の注文である。スラバヤ航路で日用雑貨を運ぶそうである。因みに船体は7,000万ルピア、それに積む54馬力のエンジンが2,000万ルピアだという。

⑤ 別の造船場ではウジュンパンダンの華人の注文でハタの生簀運搬船3隻を建造中である。船倉は6室に板で仕切られている。各室は1.8m×1.5mのサイズで3室ずつ2列に並ぶ。同様の注文を今10隻分受けているそうだ。この3隻はウジュンパンダンのパオテレ港へ運んで引き渡す。以前にBONEKOMのフジオカの注文で香港への生簀船を造ったこともあるという。

⑥ 日本では進水式があることを思い出して尋ねると、やるという。組合長のウスマン氏が手配をして船の神主がお祓いをする。オンデ(飯と砂糖とココナツミルクで作る餅)、バナナ、粳、ココヤシ油を供え、安息香を焚いて航海安全を祈るのだと。

この造船組合は以前カナダの万博にピニシを出

展したことがある。7枚帆の堂々たるピニシで、その形を示す図をもらった。実に多数の部分を組み上げることがわかる。これに12人乗り込んで、1カ月でカナダに着いたそうである。これだけの立派な船を前にもふれた全く簡単な道具で、設計図なしに作る力量は見上げたものだ。船殻の見事なカーブも板を火であぶって曲げるだけの操作で、狂いなく作るのである。

スラヤール島

華人の生魚運搬

草原の上を岬突端のビラへいく。ここで鉄船のフェリーに乗り込み、半島の東岸をスラヤール島へ渡る。すぐ、西に小島リュカンルを遠くに見、スラヤールに接近するとバシタネテの小島をかすめる。草の中にココヤシがパラパラと立つ人口の少ない島である。風はないが3mのうねりがある。25分でスラヤール島北東のパマタタに着き、ここから西岸へ出て南下する。西岸の海は鏡のように静かである。珊瑚の白い砂浜、鏡の海に映える夕焼け、美しい景色に見とれる。住民はココヤシ園地の下に低い高床家をポツリポツリと建てる。所々にエリが浜から突き出る。ベンテンについて町中のホテルベルリアンに入る。ヨーロッパ人観光客が5人ばかり居る。そのガイドと暫く話す。彼はアリフィンといい、高校の先生だが、ガイドもやり、香港の生簀運搬船の手伝いもやっているというのでその話を聞く。

① 香港の華人がスラヤールの漁民にエンジン付きのレパレパ船とテグス、釣針などを貸与し、ハタをとらせる。漁師はランコイ、スヌー、クラブ（いずれもハタの類）3種を漁る。これらの魚はサイズによって2kg以下、2～5kg、5kg以上の3等級に分けられ、2kg以下のクラスが最も値がよい。香港でハタの白蒸しは尾頭付きのまが好まれ、2kg以下のクラスの需要が最も高いからだそうである。漁師は月に15から20匹のハタを納めると数年で貸与された船やテグスを自分のものにできる。

② ハタは珊瑚礁の深い岩穴に居る。それをつり上げると浮き袋が膨らんで窒息し、そのままだと死ぬ。香港の華人はハタを生かす方法を漁師に教えた。胸鰭を持ち上げ、付け根から後ろへ鱗を数え、2枚目と3枚目の間へ千枚通しを斜めに差し

こんで浮き袋を破る。そうして生簀にいれると死なない。魚が相当量まとまると香港の華人が生簀船で集めに来る。その船の生簀は数室あり、1室は海水が自由に入る。そこから他の生簀へ海水を循環する。来航回数は年に4回程で、1回に約5トンのハタを香港へ運ぶ。途中4分の1位は死ぬと聞いているという。

③ 生魚の輸出はやはり税関を通過する必要がある、他に水産局、シャーバンダール、県庁の税務局へ書類をいろいろ提出せねばならない。その業務をアリフィン氏は手伝っている。

華人が次に来るのはいつか尋ねると明日だという。是非会わせてほしいと頼むと、聞いてみようと言ってアリフィン氏は去った。

面白い話である。古くから干しナマコや干したフカヒレを華人が集めるのは良く知られたことだが、今や生魚を集めるとは。華人のネットワークが広く深く張り巡らされていることは私もトロブリアン島で干しナマコ作りの華人に会って知っていたつもりである。クアラルンプールに住むこの華人が香港へ干しナマコを輸出していることを聞いてその実力に驚いたが、今回は生魚である。ガレソンのトビタマを集める華人、タナ・レモの造船業にとって大口の発注を出す華人達のことを知るにつれて、インドネシア在住華人の強さは充分に感じていたわけだが、生魚を香港へ運ぶネットワークが働いているとなると、この海域はまるで香港の生簀と変わらない。日本の水産会社の存在様式と違って、現地社会の組織の様々な層に入り込み、その末端まで実質的起動エネルギーを握っているわけだ。香港のアバディンに入る魚は香港周辺の海からだと思いこんでいるとたいへんな錯覚をおこしそうである。驚きである。漁業に止まらず、銀行、自動車、肥料、機械産業などでも似たようなことになっているし、また事はインドネシアに止まらず、東南アジア全体も同じ状況だということを思い起こすと、東南アジアと華南の2つの経済圏の関係はワヤンの人形とダーランの関係になるのか、それとも一体なのか。経済圏と云ったが、歴史性をもった文化圏と考えることもできる。共通の文化要素を挙げていけば、一冊の本になるだろう。要するに南シナ海に中心をおいた共通の文化圏があると考えなのか、それとも別

個の文化圏の重なり現象と考えるのか、地域研究の基本的な問題で考えが整理できていないことを思い知らされる。

4月14日

ドンソンドラム

朝、アリフィン氏が来る。スラヤールの有名なドンソン銅鼓の場所へ案内をしようという。ベンテンの町の南部、ボントバンゲンに元のプタバンゲン王国の末裔が住んでいる家があり、その北側に小さな堂を立てて保管している。巨大な銅鼓である。天板の直径は1.2m、その下の弓なりに膨らんだ部分と下端部は直径1.4m、高さが1.3m程の大きさがあり、天板と側面にドンソン文様がびっしりと刻まれている。更に親象と子象、ヤシらしき木の下に立つ大きな鳥が長い嘴を葉の中へさし込んでいる図など、他の銅鼓に見られないユニークな文様がある。銅鼓を見たあと、東へ数kmのパパロヒア集落に住むプタバンゲン王国最後のラジャの曾孫に会う。

① この銅鼓は1868年にパパロヒア地区で偶然に発掘された。ココヤシの植え穴を掘っていた農夫が発見した。当時パパロヒアの集落は珊瑚礁丘陵の平坦尾根にあった。王都も上にあり、銅鼓は丘上で発見された。今世紀初めに集落は丘裾の谷にある今の位置へ移った。伝承によると、マルク王国が17世紀にプタバンゲン王国を攻撃した時に、銅鼓はパパロヒアに埋めて隠された。それが発見されたのだという。銅鼓の用途は何だったのだろう。曾孫氏は収穫儀礼と雨乞いの際の儀器だったと答える。

② 銅鼓を入手する富の基盤は何なのか、丁字じゃなかろうかと曾孫は推定する。18世紀頃までは丁字の木が多かったが、19世紀にオランダが来て丁字の木を伐採してしまったのだという。

この伝承は面白い。確かに島の畑にはトウモロコシ、サツマイモ、キャッサバ、少々のおカボがある程度だから、それではマルクと対抗する程の王国は出来そうにもない。丁字が多かったという伝承は意味がある。

サゴの茂る谷から西へ戻り、ベンテンの港へ行く。アリフィン氏は今から生魚輸出業務があると姿を消す。

ベンテンの港

① 浜通りから50m程突き出た突堤に機帆船が1隻とレパレバ船が数隻いる。機帆船は30トンくらいの貨客船で、南のボネラテからスラヤール、ウジュンパンダンの間を1カ月かけて一周する。船倉にセメントや、布・衣類、飲物等の雑貨を積み込んでいる。甲板にテントを張り、ボネラテ行きの数人の客が所在なげに座っている。出航すると12時間でボネラテへ着くのだが、いつ出発するか判らんと呑気である。

② レパレバ船は大きな水槽を積んでいる。船上の漁師によると自分の船ではなく、持ち主はジャカルタの住人で、ここに8隻のレパレバ船を持つ。漁師は西に見えるパシ島の珊瑚礁に潜り、穴に麻醉ガンを撃って、ハタを手掴みするという。そしてアリフィン氏が言っていた千枚通しを見せてくれる。これで浮袋を破り、パシ島の東岸カフカフ沖にある生簀に売りに行くという。要するに香港華人の生簀は他の親分子分関係の獲物も集めているのだ。

ハタの生簀

生簀へ行くことにする。ベンテンから8km程南下して海岸へ向かう。すぐパッシマスグ村である。この村は海岸の海面に珊瑚の石を積んだ人工の土地に300戸ばかりの家が基盤目に並んだ漁村である。バジャウ式の村作りだ。拡張する時は海中から珊瑚を集めて造成地を伸ばせばよい。造成地は海面から30cmばかり高い。高床家の下も竹簀の子や板で囲って二階家に見える。300戸の住民はブギスや、スマトラの人、スラヤールの人、少数の華人などが混住する。岸に移動バガンとレパレバ船、サンパンがもやってある。ここでレパレバ船を雇ってパシ島カフカフ沖合いの生簀へ行く。

3m四方の袋網を16個並べ、浮きをつけた生簀が海上に作られている。周りに3隻のレパレバ船がもやい、10人ほどたむろしている。「今日は、日本人だけど、生簀を見せてもらいに来た」と雑談を始める。漁法はと聞くと今は釣りと巣穴に釜を置く方法だという。以前はと聞くと、周りの若者達が、麻醉ガンを巣穴に撃ち込んだと屈託なく言う。一番しっかりしていそうな男が、それは禁止されて今はやっていないと付け加える。その男が、

管理責任者で、筏小屋に案内される。香港の華人の持つ生簀だが、その持船から買うハタは25パーセント止まりで75パーセントは他の漁師から買い入れているとあって、厚いアタッシュケースを開ける。見ると、札束がぎっしり詰まっている。ランコイというハタに最も高値をつけ、kg 当たり12,000ルピアで買い入れる。ハタの生魚は誰からでも買うが、針を吞んでいないことに最大の注意を払う。

きれいな水に感心すると、ジャンベアやアパタナ、カユパンガン（いずれもタカボネラテ諸島）の水中公園はもっときれいだ、ナマコがたくさんおり、素潜りでとるのだという。帰る前に一寸待てと生簀の網をゆっくり引き上げ、50 cm ばかりのハタを1匹タモで掬う。棍棒でカツンと頭を一撃し、土産にくれる。赤字に黒い斑点のついたスヌー・スーパーである。レパレパの船頭に渡すと、彼はハタを甲板に放り出してエンジンをかけた。直射日光下に放り出されたハタはそれでもエラを膨らませ、口をパクパクやり、ときどきバタバタしていたが、30分程して、排泄孔から黄色い水便をピュッととばしてこと切れてしまった。

生魚運搬をする華人に対して私は始めケシカランと思っていた。グルメブームに南海の漁民を奉仕させるとは何事かと。しかしハタがこと切れるのを見たとき、私は考えが変わった。鮮度を保つという意識が全くないところで生魚運搬は大事業である。闇にさし込む大文明の光だ、華人がんばれ、と思ったのである。

ホテルに戻って料理女にハタを渡し、晩飯に料理を頼んだあと、夕方の散歩に出かけた。ベンテンの港へ出たところで、ピアへ向かうアリフィン氏とシャーバンダールに会う。アリフィン氏は生簀船が着いたという。華人に会いたいという日本人のことを話したが断られたという。私と別れた後、役所回りに奔走し、役人に土産も配って今から生簀船に行くのだと言う。残念だが仕方がない。突堤迄ついて行くと、朝見たフェリーはまだとまっている。突堤に二人の華人がいて、アリフィン氏とシャーバンダールに早口の中国語で喋りかける。一人は香港からやってきた華人、もう一人はスラヤールに住み、現地で魚集めの手配をしていると、これは後で聞いた。

やがて彼等はスピードボートで夕闇の湾をカフカフに停泊する生簀運搬船へ出発した。ホテルに戻ってハタの甘酢あん掛けを御馳走になり、ハムカ、アンサールと喋っていると、アリフィン氏が現れる。5 トンのハタの内4 トンを積んで生簀船は香港へ向かったという。1 トンの魚は針を吞んでいるおそれと病気の疑いで刎ねられたと。狭い生簀の中に3 カ月も置かれていたら病気にもなるだろう。

華人は香港市場の要求する味の材料を能率良く、安定的に仕入れるシステムを作ろうとしている。しかし全く華人のペースで事が運ぶわけではない。華人経済の歯車とかみ合うべきインドネシア側は歯車でなくて可塑性ベルトであり、エネルギー伝達システムは無段変速の褶動装置になっている。つまり華人歯車が高速回転しようとしてもインドネシア側の臨界回転速度を超えると滑ってしまう。可塑性ベルトは漁民の生活感覚と、役所の機構、役人の外的収入分配意識で作られている。華人との長い付き合いの中でインドネシアの官民共にこうした褶動装置の必要性を学んできたのかもしれない。分かり易く言うと、華人さんよ、やりすぎはよくないよと彼等は無意識に感じているということだ。その無意識の根はやはり現場で自然を見、その大きな脈動と刻々の変化を感知していることにあると思う。

4 月15日

朝のフェリーに乗るために、朝早くホテルを出発してパマタタ港に着く。パマタタの村は隆起珊瑚礁の素朴な景色を見せている。屋敷地や畑は石垣で囲い、畑にはキマメ、トウモロコシの枯れた茎、キャッサバ、ヤムが目立つ。外にはカボック、キャシューナッツ、マンゴ、ザクロ、パンノキが疎らに立っているくらいだ。天秤棒でアワの束を運ぶ人を見かける。

浜は白砂と透き通った水だ。膝くらいまでの遠浅の海で、バナナの葉を吊るした道具（リハラ）を曳いて老女達がゆっくり歩いている。ボラの稚魚とりだ。強い照り返しに疲れると浜へ上がってニッパ小屋の下で休んでお喋りを楽しみ、またリハラを曳く。数時間で100匹程とれ、1,500ルピア程の小遣い銭が稼げる。

フェリーでピラへ戻り、タナベルを経てカジャンからシンジャイへ向かう。強い雨に煙る丁字園と水田が美しい。

IV 南スラウェシ東岸

4月16日

シンジャイ漁港

朝、河口に近いシンジャイの漁港を訪ねる。機動漁船やサンパンから魚籠がどんどん岸壁に上げられ、そこですぐ競りが始まる。女性の仲買が活躍している。亭主は漁、カミさん連は魚商人と分担している。女が強いんだと一人の漁師が言う。中にはウジュンパンダンのコレクターもいる。大小のアジの類、70 cmもあるトゥングリ（サワラの類）、ハタ、フエダイなどが多い。舟底一杯に網を積み、巻上機を装備した5、6トンの漁船が多い。魚運びの終わった漁師に聞く。

① スンビラン島が主な漁場で、そこまでは機走して1時間半で着く。10人乗り組のガエ船と集魚灯船が組んで巾着網漁を行う。ボネ湾は年中漁が可能で、西風季はパレパレや東南スラウェシのコラカの船も加わる。

② ひっそりと停泊しているランボ船が数隻いる。これらは漁船ではない。1隻で聞くと、ボネの米を東南スラウェシ、マルク、西ヌサトゥンガラへ運ぶ船だ。船長はブギス人で所有者でもある。5人の乗組員はチモール島の出身である。別のランボ船はブギス人の船主＝船長とブギス人荷主が組み、やはり米をバウバウ（ブトン島の中心）へ運ぶ。7人の乗組員はアロール島の出身者である。アロール島からはナマコを積んでウジュンパンダンへ運ぶという。いよいよ東の海域への窓口に来た感じが強い。こうしたランボ船は35トンから40トンの米を積載する。荷主ブンガワ・ダラトと船主＝船長ブンガワ・ラウトが組む操業形態で危険を分担する。船荷を何処へ着けるかは船長が一人で決める。米の売買サヤが収入になり、その分配は様々ようだが、荷主が65パーセント、船長と水夫側が35パーセントというのが普通だという。船長と水夫はこの35パーセントから経費を差し引いて折半する。水夫はそれを更に7人で分けるので、分の悪い仕事だとはぼす。

ランボ船のひっそりさが気になって尋ねると、スンバ島へ向かった船が4カ月経過して行方不明で、遭難が確実にあった事から、皆消沈しているのである。

海岸平野を北上する。ブルブルからマレの間は養殖池が随分増えている。サトウキビも広い。マレを過ぎると散播水田が増える。昼過ぎにワタンポネの町へ入ると町はウジュンパンダンよりずっときれいなのだが、静かで、寂れた感じを受ける。車も少ない。今回はウジュンパンダンだけが特別に人と車とビルが増え、汚くなった印象が強い。

博物館へ寄ってみる。ボネ王家の複雑な系図が書かれている。13世紀のトゥマヌルンとバジョの女マノロン・ディ・トロとの結婚に始まり、5人の子供が生まれて云々と、それ以下たくさん名前だ。ウジュンパンダンのロッテルダム要塞にある博物館では、少し違って、マヌルンゲ・マタジャン・マタシ・ロムパエとマヌルンゲ・トロ・テンリ・ワリの結婚に始まり、初代の在位期間1326～1358年とあった。子供が3人生まれ、そのずっと下の方にアルン・パラカの名、そしてたくさん名前が並んでいた。どちらも王の降臨で始まることは同じだが、ワタンポネでは地元の女が降臨者の血統に組み込まれるところに、地元民の感情が現れている。降臨した人間はどこから来たのか判らない。モンゴルか、マムルークか。勝手な想像を楽しめるところが尤もらしい学説よりも余程良い。

バジョエ

隆起珊瑚礁の黒土平野を緩く下る道を海岸へ行く。水田にロンタラヤシがパラパラ立っている。すぐ港町バジョエである。コラカ行きのフェリーが出る突堤が長く伸びている。その付け根にはバジャウ人の水上杭上集落が海岸沿いに伸びている。珊瑚の石を積んだ造成地に杭を立てる家もある。右の方へブラブラといく。

① 海の上に船台を組んで、アラの船大工がランボ船を造っている。脇には樹皮がついたままの白材丸太が積んであり、男が一人チョウナを振って、太いガディン（肋骨材）を作っている。この木はビッティといい、マルクから運ばれたものという。船はバジョエーアンボン交易をやっている

商人の注文だという。その商人はワタンボネのハジで、60トンのランボ船5隻を持っている。アンボンへ米、干魚、雑貨を運び、帰り荷は材木である。その材木の一部を自分の持ち船作りにまわすのだ。船作りには先ずジュラガン（契約代理人を指す）を決め、ジュラガンが船大工を探す。今建造中の船の場合は船大工を5人、納期5～6カ月、労賃総額500万ルピアの契約でジュラガンが雇っている。ジュラガンは現場で監督に当たり、大工達はボス、ボスとおだてている。大工の生活費、タバコ、コーヒー代などは全てハジがもつ。

② 材木の削りカスを子供が集めて反対側の杭上家に運んでいる。ついていくと燻製ナマコ作りを若者がやっている。聞くと、近くの砂底の海でバジャウ人やブギス人が20m程潜って拾うのだという。4人で組んで、二人が酸素を送り、二人がマスクをかけて潜る。彼等はとったナマコに塩をして手桶に貯蔵している。この若者はそれを買集め、煮て燻製にする。削りカスはその燃料に使っている。燻製ナマコは台湾の華人が買集めに来る。一桶の塩ナマコが1kgの燻製ナマコになる。脇にこの1週間で作った燻製ナマコがアンペラの上に積み上げてあり、75kgくらいあるだろうという。

ボネの商人、ジュラガン、アンボンの材木屋、船大工、ナマコ採り、燻製ナマコ作り、ナマコ賣いの華人と、違う仕事の系列が港で交叉している。様々な人が海と森の産物でくっついているのだ。ハムカとアンサールに面白いなと声をかけると、二人は何が面白いかという顔である。

国道に戻り、北上して内陸のテンペ湖畔にある町シンカンへ着く。14年前に泊まったアバダホテルはワジョ王国のラジャの住居である。バリ風にしつらえた庭に石彫りの怪物像が置いてある。庭のテーブルは欧米人観光客が占拠している。

4月17日

シンカンの元郡長官舎が小さな博物館になっており、元郡長の息子だという初老の男が管理がてら住んでいる。華人の容貌だ。展示品はサゴースト焼きのフォルノ、竹やロタンの編み物が少しあるだけだ。シンカンはワジョ王国の中心で、元はトソラに王宮があったんだと尋ねもしないのに

言う。郷土意識が強い。トソラは14年前にも訪れたことがあると思い出す。東岸のバリマへ出る途中の珊瑚礁丘陵に塊村が並んでいて、少し大きいだけで変哲もない高床家がワジョのラジャの王宮だった覚えがある。確かポルトガルの大砲を墓にしていた。

シンカンから東北へ草丘地帯を越えて、シワへ着く。東岸は東風季にも雨があり、暗い緑の林が水田を囲んでいる。水田にはサゴも多く、景色が湿っぽい。シワの町は細い感潮川沿いにゴミゴミした町が続き、スマトラの新しい開拓町と似た感じがある。ぬれサゴ包みの多い市場を見ながら、下流へ進んで港へ行く。

シワ港のサメ漁網元

幅広の貨物船に20人程の人夫が米、カカオ、肥料を積み込んでいる。カカオは東南スラウェシからの輸入品である。川沿いに200mばかり歩くと漁港があり、5トン位のジョロロ船が川岸にずらっともやってある。大きなドラムカンを床下にたくさん並べた家に上がり込む。偶然だがその主人ハジ・ヤシンはシワに4人いるサメ漁のブンガワ（親分）の一人である。その話を聞く。

① 1970年にシンジャイからシワに移った。当時は刺網で様々な魚をとっていた。時々サメも掛かり、フカヒレを作った。サメはヒウ・ボトルとヒウ・ヒタムと2種類いる。ヒウ・ボトルのフカヒレは白く高価だが、ヒウ・ヒタムのフカヒレは半値以下である。1985年に3人の日本人がシワに来た。テリマ・ヌンガルという水産会社の社員で、そのリーダーのタクマは操船、漁具のベテランだった。彼等はサメの肝油の作り方を教えた。以前はサメの肝油はランプの油にするくらいだったが、それが薬や化粧品に使えることと、船上で肝油を作る簡単な方法を教えた。そしてサメ漁場探しが始まった。

② 現在サメ漁のジョロロ船が100隻いる。4、5人で乗組み、補給と漁の利便から5隻が一同で出漁する。漁場はぐっと広まって、今はイリアン海域とフローレス海域へ行く。イリアン海域へは次のルートで漁をしながら進む。ムナ・ブトンと東南スラウェシの間のティウウォロ海峡を抜け、ケンダリへ1日、そこで油と水を補給し、ブル島へ3

日、そこはサメ漁場である。セラムへ1日、ここでもサメ漁をする。イリアンのソロンへ2日、マノクワリへ1日、ここもサメ漁場がある。ビアクへ1日、マノクワリービアク海域が最も良いサメ漁場だ。ビル島（不明）にも漁場がある。1月に出発し、3カ月程で帰る。漁具はサメ用の延縄とその他の魚用の刺網をもっていく。延縄は水面下15mに張る。

③ フローレス海域へは次のルートをとる。南下し、スラヤールを経てジャムペア（ボネラテ諸島）へ着く。ここにはサメ漁場がある。更に南下してフローレスのラブハンバジョへ入り補給をする。フローレス西端のモリ海峡を南下し、ここで2ルートに別れる。1つはスンバのワインガプからスンバワ南岸へ、1つはフローレス南岸を東へ進んでアロールからチモールへオムバイ海峡を横断し、ディリからチモール北岸をクバンへ入る。サヴからスンバ北岸、スンバワ南岸へ進み、アラスあるいはサベ海峡を経てシワに帰港する。良いサメ漁場はディリーサヴ間、スンバワ南岸である。スンバワ北岸はサメは少ないが、トビウオは多い。

マドゥラやスラバヤのサメ漁船団もサヴ、チモール海域まで出漁している。マドゥラの船はずんぐりしていて、シワの細い船の方が速い。

④ 肝油を買う会社は数社ある。1回の出漁でドラムカン2缶の肝油を作る。サメの肉は塩漬けにして持って帰る。

礼を言って辞す時、肌塗ってもいいし飲むと元気が出ると肝油を小瓶に貰う。

日本の水産会社も地元漁師に直接関係をもつ場合もあるわけだ。

シワの町で昼食時に養殖池を経営する男に尋ねられる。マングローブに池を掘る時伝統法と近代的方法とどちらが良いかとの質問である。伝統的方法は、周囲のみ掘るが、近代的方法だと全面掘削をするというので、伝統的方法の方が良い、全面掘削すると毒が大量に出ると答える。男はそうなんだ、全面を掘ったら、pHが4に下がってしまい、エビが成長しない。そうか伝統法が良いのかと大喜びである。

シワからパロポへ走る。低い丘陵は丁字園が広いが、丁字の値が下がっているせいか手入れをせ

ず放置した園が多い。今、カカオへの植替えが進んでいる。やがて海岸沿いの道になり、マングローブの切れ目に時にアウトリiggerが見える。パロポの町へ入る。ここはワタンボネよりももっと静かな、うらさびしい感じの町である。しかし電話局だけは新しい白塗りの建物に変わり、国際電話がすぐ繋がる。

パロポ港

パロポ港は黄色い石油タンクが1つ目立つ位で、長い突堤にボネ湾の村々へいく長い客船と漁船が数十隻密集している様は以前と同じだ。ボネ湾奥に移動バガン（バガン・ブラフ）がたくさん見える。1隻のブラフの上に30m四方のバガンを組み立てるものだ。港のすぐそばのバガンで聞く。

① ここの移動バガンは自力でなくて曳き船で移動させるのだという。水深40ドゥパ（70m）位までがバガン漁の漁場である。1基のバガン建造は4,000万ルピアの経費がかかる。自分の資金を1,000万ばかり作り、残りは華僑から借金をする。バガン材のワイヤ、材木、ウィンチ用エンジン、網、針などを扱う商人である。毎月返済をして、数年で皆済し、使えなくなる迄の残り数年は自分の稼ぎになる。

② 突堤の北西側にブギス人の水上杭上集落がある。それを見にいく。基礎はバジャウ人同様珊瑚礁の石を積んでいる。家々は細い栈橋道で繋がっており、下にはサンパンにフロートをつけた形のアウトリiggerが並ぶ。海側は砂堤を盛り養殖池を作り、その中でアガルアガル（オゴノリ）をとっている。採集するだけで、タカラールよりも随分粗放である。全部とらずに一部を残しておけばよいそうである。一部の池は目の細かい網で囲っている。カニの子供を入れて養殖しているのだ。

③ 村の端、マングローブ脇でブラフを作っている。キール長に比べて舷が随分長く、喫水が深い。バガン・ブラフ用で、機械装備が重く、沈むので喫水を深くするのだそうだ。

パロポの町へ戻る。町は華人の店ばかりである。町の華人、水上漁村のマレーという棲み分けの典型である。

4月18日

朝、再び港へ行く。漁船やバガンの獲物が突堤に陸揚げされ、イワシやジャコ、アジなど小さい魚の籠をベチャが市場や店へ運んでいる。突堤先端の鉄船にクレーンで2種類の材木を積み込んでいる。白材のアガティスと赤材のラワン材である。甲板に直角に2列で雑な積み方をしている。材木は甲板両側から1mずつはみ出している。少し横揺れすると荷崩れしないか気になる。

南下してバジョエの港でコラカ行きフェリーの出発を待つ。車はウジュンパンダンへ帰す。夜8時に出発。長崎県生月町第5フェリーと文字が書かれた中古フェリーである。出発後しばらくして、船長が呼んでいるとハムカに操舵室へ案内される。船は買ったばかりで、計器、舵、cpp（プロペラ制御）など全て日本語の表示に慣れてなくて判らないものがあるから、意味を教えろとのこと。レーダーは回っているが映像は写らず、ジャイロコンパスも off の状態のまま、経験と勘で走っている。サーチライトは絶えず動かして海面の監視は怠らない。見上げたものである。

夜のボネ湾は漁り火がたくさん瞬き、涼風が吹く。美しい世界である。

V 東南スラウェシ

4月19日

朝4時、コラカに着く。ベチャで町東外れのホテルに行く。女装の若者が扉を開けてくれる。3人共7時半まで寝る。起き出して朝食をとり、タクシー代わりのベモを探す。コラカの町は西部劇の開拓町さながらで、人が多くゴミゴミし、バラックの店が並んでいる。

ボネ湾東岸の伐採・漁業・園地複合

ベモで海岸沿いに北上する。道沿いの低い丘はギンネムの木陰にカカオ園が広い。海岸は薄いマングローブ帯の中に所々養殖池があり、サゴの群も点々と立つ。1時間ばかり走り、狭い水田を背後に持つ浜堤の村でとまる。

コラカ県ウォロ郡サニサニ村

① 村は浜堤にあるが、漁船は殆ど見ない。砂浜に引き上げた数隻のレパレパカヌーがある位だ。

両側にブンレ（三角網）を装着してあるので稚魚とりだろう。船の代わりに丸太と角材が砂浜にたくさん転がっている。ブギス式の立派な高床家へ行くと主人が顔を出すので聞くと、漁も少しするが、主な仕事は丘の裏山から材木を引き出すことだ。この男もボネから伐採目当てに移住してきたという。伐採は字トシバに住むブギス人アミルが取り仕切っている。アミルの許可をもらい、チェーンソーを借りて、村から7km奥の山へ入り、伐採する。対象の木はピニシのキールと肋骨材になる鉄木、船殻張りに使うカユ・ボティ、家用のレンベヤトンドの木である。アミルはチェーンソーを3台持っているが、過伐採を避けるためにふやそうとはしないという。山の林にはドラムカン程の太い木がたくさんあるそうだ。切り倒した木は現場で製材し、水牛で浜まで引き出す。材木はビラとシンジャイから買いに来る。ビラの造船用材は殆どこの辺りの材であるという。

② 漁はトゥンバン（イワシ）やボトボト、小さなチャカラン（カツオ）を自家用にとるくらいだ。定着してから、カカオ園地と水田を開き、浜の後ろに少しの養殖池も作ったところである。

更に1時間ばかり北へ走る。低い丘は林が切られ、畑とココヤシの下のカカオ園がどんどん新しく広がる様相だ。

北コラカ県ウォロ郡ラオネ村字トシバ

① この村も狭い水田を後ろに控えた浜堤の上にある。浜にはレパレパカヌーだけでなく、折しも



写真10 定置バガンが袋状の四手網を揚げているところ。キビナゴ、シラスなどが大量に獲れる。

建造中の大きな移動バガンがある。このバガンは2隻のプラフの上に10m四方のバガンを設置した形である。作業をやめた男に聞くと、この村はシンジャイからの移民で、主な仕事は伐採と漁、他に水田と養殖が少し、そして丘のカカオ園を今拡げている。伐採は先ほどの村と同じくアミルが取り仕切っている。樹主はダマール（アガティス）、カラビ、鉄木、ピンタンゴロ（フクギの類）、ポンド、ポティ等である。ピンタンゴロはバガン組みに使い、他はピニシ用に売る。

② バガンの漁季は東風季である。西風季は波風が荒い。バガンの中央は床を張り、キャビン小屋を置く。床にあけた孔からランプを吊るし、四手網で魚をとる。ルレ（シラス）、ラヤン（ムロアジの類）、カトンボ（アジの類）、トゥンバン（イワシ）、チャカラン（カツオ）などがとれる。ハタは延縄でとる。生きたルレはコラカのカツオ漁民が餌用に買いに来る。コラカ沿岸は材木伐採と漁業を行う集落がずっと続くという。

伐採業のボス

少し戻ってアミル氏の事務所を訪れる。奥さんと丁度家に居た。奥さんはトラキ人だが、何の変哲もない中年女性である。以下は彼の話の内容である。鉄木その他の船材は東カリマンタンを除く他の地域で減ってしまったので、多くの材木商はコラカに来る。この家の前の海へ来る。随分いろんな地方からだ。ビマ（スンバワ島）、タナベル、バジョエ、シンジャイ、ウジュンパンダン、スラバヤ、バリ等から、大きなピニシで来る。

アミル氏自身は10年前にボネから移ってきて、始めはバガン漁をやった。その内コラカの材木需要が大きいことに注目して材木伐採に転じた。チェーンソーを買い自分で木を伐り、水牛で浜へ運んでカティンティンか小さなプラフに積んでコラカへ運んでいた。1989年にコラカの森林局に申請してIPK（森林利用許可）を得た。IPKは地元民に開かれた小規模な使用権だ。土地の上限は20ヘクタール、有効期間5カ月にすぎない。しかし利用地域の正確な境界が引かれているわけではないので、実際はもっと広い土地で伐採をすることになる。期間は延長出来るので、5カ月毎に2,000万ルピアの使用料を払ってIPKを更新し続けている。

材の値段は立方メートル当たり鉄木が12万、メランティが10万、カユ・メラが8万ルピアだ。

アミル氏は大規模なHPH（森林利用権）に比べるとIPKなどつましいものだと力説する。例えばHBI伐採社を見てみろ、北コラカのウォロで広大な林を伐採し、大量のアガティスを日本とヨーロッパへ輸出しているぞと言って私を見つめる。

何も森林局に言いはしないから安心してくれと答え、礼を言って辞す。許可面積より少し広い林を伐っている後ろめたさはあるが、堂々と大面積を伐っている大会社への腹立たしさが入り交じって、彼は腑に落ちない感情を持っているに違いない。それはこちらの気持でもある。熱帯林消滅の理由という、日本の何も知らない識者達はすぐ貧しい人々の焼畑と園地拡大が原因で、悪いのは貧困なのだから貧困を無くすべきだなどとオダを並べる。冗談もホドホドにしてくれと言いたい気持ちだ。日本や欧米の「豊かさ」を手本に、これに追いつきなさいという姿勢を続けている限り、もっとたくさんのアミルがもっとたくさんのチェーンソーを使って、せっせと林を伐るだろう。それどころかHBI社にもっと新式の機械を輸入して日本とヨーロッパの白木材需要にもっと素早く応えてくれるだろう。焼畑民は何も貧しいから焼畑をやるのじゃなくて、熱帯林での生態的適応が焼畑なのである。貧乏人は考えがなくていかんと思っている金持ちが美しい木目材と合板と紙を大量に水の如く使ってくれるから、熱帯林は消失しているのだ。アミル氏の腹立たしさがこちらに乗り移る気分である。

コラカ港漁船埠頭

コラカに戻り、ボラの焼き魚にライムの汁をかけて昼食をすますと、港へブラブラと出かける。

通りの岸壁に小さいレバレパカヌーがたくさんもやい、造船中のランボ船があり、海上にバガン・プラフが点々という。漁港埠頭は木造栈橋で、その端に2隻の漁船が停泊している。船首迄幅広い甲板が伸び、白塗りキャビンのある30トン程の漁船で、少し感じが違う。乗組員に聞くと、シンジャイのカツオ漁船である。機動ランボ船で12人が乗り組み、一本釣りをを行うのだという。さっそく釣の実演をしてくれる。陽気な連中である。甲板

のピットを開けると生簀があり、中に餌のルレが居る。小さな柄杓でルレを掬い船縁から海にパッと撒き、竿を後ろへビューンと振り回して、もどりの疑似針を海へ投げる。釣り上げた竿を立てて糸を後ろへ振り回し、しゃくってまた糸を海へ投げる。日本のカツオ一本釣りがそれこそ寸分変わらず技術移転されている。ルレの撒き餌は始めの10分だけで、後は水だけ撒くという。大漁だと12人が奮戦して1時間に千匹釣れる。氷詰めにしてケンダリにあるカツオ節（タバ）の会社へ売ることだ。

漁場はボネ湾で、そこにロンボン（浮漁礁）を作っているそうである。沖縄のパヤオと同じで、柴漬漁の発想といえるだろう。ボネ湾のロンボンは錨を沈め、竹筏を海上に浮かし、海中にココヤシの葉を一杯垂らす形だそうである。

漁師達にカツオ節は食べるかと尋ねると、食べない、地元の間人はカツオを煮て、ココヤシミルク、トウガラシ、コショウを加えて、スープを作るといふ。一種の潮汁だ。

夕方になり、ケンダリへ向かう。ところがコラカから20分程走った山中でベモの運転手は村へ入り込み、車庫へ車を仕舞ってしまった。1日の契約は終わったということだ。ハムカ、アンサーと口論になるが、こちらは早々と諦めてしまった。道でしばらく待って乗合ベモに乗り込む。元々6人乗りのバンに座席を5列設け、20人程詰め込む大変革を施してあるので、皆膝を抱えてピクリとも出来ない姿勢を強要される。ケンダリ迄4時間程の苦行である。

途中、大きな盆地の中心に賑やかな町がある。14年前はジャワ人移民が入植し始めたばかりで町など全くなかったのだが、驚くほど、村や町が増えている。インドネシアは本当に変化の真っ只中にある。そして変化する最先端に人が集まり、林と直接対面をする。人界の最先端と林界の最先端はどちらもエネルギーが濃縮する。負けないように人はバラックにライトをやたらと点灯し、大音響をスピーカーから流し、ラメイラメイにする。他方、林は林縁に高木林の中より余程木を密生させ、入り込むのが恐ろしい緑のカーテンを下ろしている。そして人が少しでも手を抜くと、人界へ

入り込んで、乱された林界を回復しようとする。人間と林が正面对決している様相が14年前は濃厚だった。今は人界が優勢だ。

夜遅くケンダリの町へ入る。だだっ広い町である。

4月20日

水産基地ケンダリ

ケンダリの町はケンダリ湾の北岸にある。ケンダリ湾は東西 6~7 km の細長い湾で、湾口が絞られている上に、入口にブントコ島があって蓋をし、天然の良港である。かつてブトン王国の陰に隠れて余り知られなかったこの良港は、今、バンダ海の水産基地に変貌しつつある。幾つかの水産会社が冷凍庫や加工場を作ったのである。ケンダリ湾南岸の2つの会社を訪ねた。

ヤナギ・ヒスタララヤ会社

① 突然事務所を訪れて、うまく現地事務所所長の長谷川氏に会えた。この会社は愛知県知多郡に本拠のある水産会社ヤナギの現地法人で、25年前から太洋漁業、三井水産と組んで行っていたヌサンタラ漁業から独立して作られた会社の由だ。

② ポストを数カ所においてスピードボートを配置し、新鮮な魚を集めている。ポストの所在地はマヌイ島（ケンダリ東方洋上約 60 km）、トベア島（ブトン海峡北口）、ラヒア湾（ケンダリ南 50 km）、ラカロ（ラヒア湾の東方）、ティナンゲア（ティウオロ海峡）、カバエナ海峡の浮ポストなど。ここから更に伸びたネットワークがあるのだから、集魚範囲は相当広く、且つ、現地の漁民と密な関係があると思われる。

③ 何に苦勞するかと聞くと、鮮度管理ですと明瞭な答である。網の糸自体が違うそうである。日本の網糸は多繊維振り合わせでクリスピーな弾力性があるが、こちらの糸は単糸のワイヤーみたいな糸で、先ず網から問題がある。更に網を仕掛けてから揚げる迄時間をおきすぎである。揚げた時には既に死んで、しかもワイヤーのような糸が食い込んで、鮮度が落ちてしまっている。成程そんなものかと感心する。それに氷の使い方をケチってケンダリに着いた時は溶けてお湯になっている。ダメですワと。現地ではそうなると干魚にしてま

すね、と少し弁護する。干魚の作り方を知りませんワ、カンカン照りの下に放り出しておけばいいと思ってるけど、干魚は風に干すということなんです、と手厳しい。そう言われるとそうだ。陰に干している風景などこちらで見たことはない。

いろいろ成程もっともな批判を聞いて礼を述べて退散する。

ダルマ・サムドゥラ社

この会社の社長は華人、工場長はジャワ人で、工場長が忙しそうに社員と話をしながら対応する。ウォウォニ島北岸、ラベンスク島東岸、ティナンゲアなどにやはりポストを置いて40隻のボートで集魚し、カカップ（アカメの類）、ロリ（カマスの類）を氷ブロックにして日本、ヨーロッパへ輸出している。西風季の方が処理量は多く1日25トンにも達するが、東風季の今の季節は魚の入荷が少ない。漁師に融資をして関係保持に勤めているようである。融資はエンジンの乗せ替えが主対象となる。しかし資源保全のため、延縄を奨めていると水産局の役人の口移しのようなことを言う。東南スラウエシではトゥカンブシ諸島が資源のまだ豊富な漁場だと教えてくれる。そこのハタ類がウジュンパンダンへ生魚でどんどん送られているそうである。

水産会社の一角にはジャヤンティグループの大工場が一際目を引く。この工場は餌用のイワシ、アジの箱詰めと、凍結カツオを作っているとサンパンの船頭が言う。輸出先は聞かなかったが、日本の可能性が高い。

ブギスの漁師村とカツオ節作り

ケンダリ県ポアシア郡ラプル村

ケンダリ湾南岸の漁師村を見ようと、工場地区の東へ行く。この村はマングローブ泥に珊瑚礁の石を積んだ上や、海中に、風通しの良い杭上家屋が並んでいる。ボネから移住した漁民である。西風季にカティンティンカヌーでウォウォニ海峡へ船団を組んで出漁し、刺網でチャカラン（カツオ）をとる。東風季はケンダリ湾入口のブンクトコ島でイカなどをとったり、トンダトンダとここでいう底引き網をカティンティンで曳いてナマコをとる。ナマコはよくとれて、1週間に一人が200 kg

集めるのも難しくない。この村の住人は若いナマコにライム汁やココヤシミルクをかけて生食するそうだ。その食べ方はラワという。

カツオ節作りについて尋ねると、自分達は作らないが、ブトゥン村にチャカランを燻製にするカツオ工場があり、製品はイカン・カユと言うので、これはカツオ節だろう。そこへ行くことにして去る。道まで引き潮で露出したマングローブ泥の上を歩くと、カニ穴へたくさん小さなカニが出入りしている。

ケンダリ県ケンダリ郡ブトゥン村字カシランベ

ケンダリ湾北岸へ渡り、東へ走ると湾入口の関門部を過ぎてから珊瑚礁海岸が開く。石垣積みの湾岸にカツオ漁船が2隻停泊している。その岸に小さなカツオ節工場があった。丁度運び込まれたカツオを十数人の女性が包丁でさばいている。先ず腹を開いて洗い、大鍋で煮てから2枚に下ろしたものを燻籠に並べて燻製炉の上に重ねる。燻製が終わるとムロに閉じて1カ月おく。製品は売ったばかりで見ることができなかった。

工場の持ち主はパレパレ在住のブギス人でハジである。責任者によると、年間生産量は200トン、全量を日本人バイヤーに売ると言う。ヤナギの長谷川氏の話ではケンダリのカツオ節は味の素が買って加工している由だった。

華人の店、日本人の会社

日本の会社の商品収集能力は見上げたものである。鮮度や品質維持の上で消費者に見えない苦勞をしていることだろう。しかし収集前面に日本人が出ている例は少なく、そこが華人と違う。既に処理された製品あるいは半製品の買い取りを都市の会社に居て指揮する形だ。摩擦を避ける点からは賢明な方法だが、現地の人とのつながりは薄くなり、現場の状況にふれる人間は少なくなる。現地の自然、人、社会と切り離された商品だけが集められる。現地の人にとすると、金をいくらでも持っているかの如く見える日本というもの、日本人は顔が見えず、得体が知れない。日本人がどんな庭を好み、どんな家を立て、何を食ひ、どんな付き合い方をし、どんな小説、歌、芝居を好むのか、何を喜び、何に怒るのか、要するに日本人の

生活実態，文化実態が判らない。それが判らないままに，彼等の生活空間は日本製のラジオ，バイク，漁船のエンジンから始まって電話，テレビ，車，機械と溢れるばかりのメイドインジャパンが入り込み，代わりに，トビタマも，ハタも，エビもカツオも，アガティス，メランティ，ロタンと何でも買ってしまう。林を剥がして作られた園地のオイルパーム，ココヤシ，バナナ，丁字，ニクズク，アルビシアの木まで全部運び去ってしまう。得体の知れない怪物だ，と彼等が思わないと考えるのは現地の人間に知覚器官がないということと同じ事だ。

日本人は外から中の見えない防弾ガラスの箱に入って品物をやりとりするだけだ。華人は生身むき出しで，いざこざをしながらも，顔が見えている。狡賢いトリックを考える人間だということも判っている。ともかく華人は人間と認知されている。しかし日本人は人間と認知されているだろうか。大変心許ない。短期的に，且つ，経済に重心をかけて見ると日本人の方法は賢い方法かもしれないが，長期的にはどうだろうか。経済だけでなく，文化をもつ人間として彼等と共存し，陸・海の生物の一員という感覚を取り戻すには，日本人は考え直す必要がある。商品の付き合いだけでなく，生身の人間の付き合いが要る。

4月21日

ケンダリからムナ島トランドナ迄

朝，アグス及びラ・ファリキの2青年に引き合わされる。ハサヌディン大学のアリフィン・スラタン氏がムナ，ブトン島の旅行の案内に差し向けてくれたのだ。アグス氏はケンダリの商社の社員，ラ・ファリキ氏はハサヌディン大学の講師でムナ島出身である。

ムナ島へはケンダリから南下し，トロブル港からムナ島北端のタンボ港へフェリーで渡るルートである。ベモを雇って5人で乗り込む。ケンダリから南下の道は低山地帯で，斜面の林は焼畑景観である。山裾や谷にはサゴヤシが多い。トラキが焼畑をやっているのだ。道近くに時々その家が見える。平屋でニッパアタップの屋根，壁は割竹で囲う。サゴとオカボが主食，アランアランの草原で鹿，クスクスを狩りその肉を好むそうである。既に90パーセント

はイスラームになっているという。

ブンガルクの盆地に水田が広い。政府移民開拓が入植しており，JICAも農業技術者を送り込んで支援している。

トロブル湾はフェリー用突堤の脇に小さな漁港岸壁が作っており，長いジョロロ船が魚箱を乗せている。海上に錨を打って，新式の漁船も1隻いる。村は小さくて，岸から張り出した水上通路沿いに杭上家屋が5軒ばかり並んでいるだけだ。その1軒で数人が閑話をしている。覗くと日本人が一人いる。ヤナギのポスト担当者のアイカワさんで，港の新式漁船はこのポストからケンダリへ魚を運ぶスピードボートである。今，魚が集まるのを待っているのだ。他の男達は仲買人で，アイカワさんの実質の手下だ。フェリーに急がされてすぐ別れる。

海上前方はムナ島がよく見える。右手にはるか水平線上にかすかにカバエナ島が見え，近くにティウォロ諸島がよく見える。ティウォロ諸島は環礁が発達し，魚が多いとラ・ファリキが言う。彼によると，今我々が辿っているルートは昔から重要な連絡路である。つまりウジュンパンダンからバジョエーコラカーケンダリームナ島のラハーブトン島のバウバウ迄をつなぐ。バウバウからは更に海上をトゥカンブシに渡るルートがあるのだと言う。

ムナ島は隆起珊瑚礁で，低平な島陰を見せている。東側のトベア島はもっと低平で，海上2mを越えない。やがて狭い水道に入りムナ島北端のタンボ湾へ着く。タンボの小さな漁村の背後はカルスト台地で，すぐチークの植林地帯に入る。1954年頃の植林の由で，40年を経過して高さ15m，直径40cmくらいに成長している。これを過ぎると草原で，あちこちにシンクホールの窪みがある。それを柵で囲い，窪みを抱く形で屋敷地がある。畑も柵で囲う。夕方，ラハの町に着く。ラハの町は日本軍が作った新しい港町である。ここも華人が目立つ。ラ・ファリキが言う，店は全部華人だと。ラ・ファリキは伯父さんの家に泊まる。我々はシャビーなホテルに泊まる。

4月22日

ラハを出てカルスト草原を走る。所々畑がありトゥモロコシとキャサバ，ヤサイが植えてある。

石囲いで、高床の小屋が必ずある。豚を見張るためだと。畑は2年間植え付けると他へ移り、3年おいて戻る輪作を行う。常畑的ブッシュファローである。ブッシュファローといっても木はなくて、ユーパトリウムが高く茂っている。

シンクホールの底にアレンヤシの濃い緑が多い。トゥアックを採り、砂糖作りを行う。

タンポからムナ島南部のトランドナ港まで続くこの道は16世紀のムナ王国時代に既に馬道として在ったそうである。ムナ王国はポルトガル人が16世紀に来航した時には既に存在し、ポルトガル人とココヤシ油の交易を行った。ボネとゴアの戦いの際、ムナ王国はゴワ側につき、ブトン王国はボネ側について争った歴史がある、とラ・ファリキが説明してくれる。

少し高いカルストテラスを過ぎた後、緩く下り、ワクルの集落に入る。先ほどの高い台地にムナ王国の王都があったが、1973年に今のワクルの位置に移った。町中には旧王都から移された慣習家屋が数十戸ある。青白にきれいに塗った高床家である。

ムナ島東南の地峡にさしかかると、東側の湾にコタ・ロンベの漁村がある。珊瑚礁の海が白、ピンク、青と夢幻的な美しい縞目を見せる。静かな湾には移動バガンが点々と居る。海中に珊瑚の石を積んで立てた家から内陸へ100戸ばかり、碁盤目の集落を作り、真ん中の市場では多量のキャッシューナッツを干している。コタ・ロンベから南側のカルスト台地にはキャッシューナッツ園が広い。かつてのココヤシは1970年代にキャッシューナッツで替えられた。管理が簡単な上、収入も良いからだという。

草原の中に突然林が現れる。淡緑色の薄くて長い葉のついた、多分落葉樹種だろう。現地名ファファといい、別名ビッティともいう。タナ・レモの造船所で船殻材に使うといていたことを思い出す。学名は *Vitex cofassus* だとラ・ファリキが言う。

間もなくトランドナ港に着いた。バウバウの湾と向き合った湾の奥にある家はやはり珊瑚礁の石を積んだ人工地に作り竹編み壁である。油を流したように静かな湾内にはジャラという刺網を張る杭が並ぶ。スマトラのエスチュアリーによくあるトゴック・パリスに似ている。

ムナ島トランドナ村

① ジャラの獲物はトゥリ（イワシ）である。2プラフ・バガンもある。プラフ作りはボロニタやカンダブアの材（共にフタバガキ科という）を使う。バガン材は竹である。これの獲物はルレ、ラヤン（ここではトビウオ）で、あちこちで竹ムシロにルレを干している。トビウオは鮮魚で売る。漁に親分子分関係はないのか尋ねると、ない。

② 沿岸の足はボディ・パタンと言われる20mを越える長いきり船構造船だ。くり船はメランティを使う。直径1.2mもの大木だ。この材は中部スラウェシから運ばれるのだという。くり船に足す舷側板はエテという地元の軟質材だ。屋根をつけたこの船は最大100人の乗客を乗せる。珊瑚礁のきれいな魚をつかまえてきた子供達は相当金髪が混じり、メラネシア的な容貌が目立つ。

ブトン島バウバウ

トランドナ港をフェリーで出発し、対岸のブトン島へ向かう。面白い光景は海上のあちこちに白い飛沫が飛び、魚がたくさん空中を飛ぶ様だ。カモメが急降下して魚をとらえる。ルレやトゥリの小魚がトンコル（スマの類）やチャカラン（カツオ）に追われて飛ぶのである。そこは海面が沸き立つように見える。

バウバウ港へ入る手前で右側にココヤシの茂った小島がある。マカッサル島という。ゴワとボネ戦争の時、ブトンへ逃げたアルパラカを追ってハサヌディンがここに基地をおいたのが名前の由来だとラ・ファリキの説明である。

1時間でバウバウ港に入る。海から見るブトン島は海岸にココヤシ園が広く、斜面も緑の豊かな



写真11 ブトン王国以来の伝統が続くコプラ輸出。バウバウ港には古い倉庫が立ち並ぶ。

島である。栈橋にスラバヤの大きな貨物船が入っている。物流も人的交流もムナ、ブトン両島はスラバヤと関係が密であり、ケンダリ、コラカはウジュンパンダンと結びつきが強いそうである。

港から裏山へ登る。そこはブトン王国時代の王都で、大きな城砦のなかにウォリヨ宮殿がある。全長 3 km の城壁で囲まれ、12門がある。城壁は珊瑚の石を高く積み、その表面は卵白と石灰を混ぜた堅いモルタルで塗り固めている。崖を登って門を入ると16世紀に建てられたという古いモスク、メスジッドアグンがあり、モスクの中にバトゥ・ポパウアという祭壇がある。床に十字型にタイルを貼り、その中央にヨニ的な窪みがある。新しく即位したスルタンはそれを跨いで立ち、左足をヨニの中に入れて、力を受け継ぐのだという。構造的にはもともとリングが立っていたと推察されるが、今は見あたらない。

城塞の奥の方にウォリヨ宮殿がある。チークで作られた大きな二階建てだ。38代目に当たるスルタン末裔が住んでいる。腕太く、胸毛濃く、アラブ的容貌の男である。彼の話によるとブトン王国の始まりは13世紀にワカアアカあるいはコカ・チンともいう女王である。彼女はフビライハンの孫で、ジャワのマジャパヒットのラジャの王子と結婚したのが始まりである。6代目のラジャが1546年にイスラームに改宗して初代スルタンとなった。

ブトン島スルタン王国の最盛期にはムナ、ティウウォロ、カリンスス（北ブトン）、カレドゥパ（トゥカンブシ諸島の1つ）、を配下に置いていた。ブトン王国の経済的基盤は何だったのか尋ねると、ラ・ファリキがココヤシとココヤシ油、と答える。

海岸通りへ戻り、アグス氏の親戚の店へ行く。船舶の燃料油を扱う傍ら、魚の仲買もやっている。油くさい店で、イカの煮物の昼食を御馳走になる。扱う魚はトンコル（スマ＝サバの類）、エコール・クニン（フエダイの類）、チャカラン（カツオ）が主で、資源保護のために網は使わず、一本釣りでとる。良い漁場はブトン島南からトゥカンブシ諸島への海域である。香港、台湾の生簀船が多数そこに集まり、カカップ（アカメ）、スヌー（ハタの類）を買い付けているという。

真珠はと尋ねると、マカッサル島に真珠養殖会社があり、日本人が二人いる。一人はバウバウの

華人の女と結婚しているとのことである。夕方、海岸通りで晩飯をすます。カツオの焼き魚が出たが、殆ど半分腐りかけだ。ともかく鮮度を保つという意識はないから、半腐れに当たったのは運が悪いと諦めるしかない。

マカッサル島の真珠養殖

マカッサル島は対岸 2~3 km で近いのだが、潮流が強く、スピードボートで20分程かかる。島に近づくと海上の監視ポストが鋭いサーチライトで執拗に追う。養殖ユニットの突堤には養殖用網カゴがたくさんある。日本人技術者はバウバウへ食事に出かけた留守で暫く待つ間に社員と雑談をする。サーチライトは盗難防止のためだとか、キッチンマンをかけて、サシミ、イカサシのうまさを知ったなど。

やがて技術者が帰ってきた。以下はその話である。



写真12 バウバウのマカッサル島で真珠養殖に専念する日本人平賀さん（中央）と、左からラ・ファリキ、真珠を持つアンサー、白蝶貝を持つハムカ、アグスの諸氏。

① 小柄、柔和な感じの人で、平賀宗和さんといい、志摩半島片田の出身である。父親がやはり真珠養殖の玉入れ職人で、子供の頃からその仕事ぶりを見て育った。1976年、ドボのアラフラ真珠会社へ入り、11年間働いた。日本の会社は金子真珠と2社だった。この10年来、中国人の真珠養殖会社が10社以上出現した。アラフラ真珠にいた友人がブトンで真珠をやりたいのだと誘われ、ここへ来て7年になる。ティアラ・インドパールという会社だ。この近くではケンダリ南のコロノ湾にも

う1社高田真珠がある。

② バウバウ海峡は真珠養殖に良い海だ。潮の流れが適当にあり、水がきれいで、川からの養分も程良く流れ込む、普通は餌やゴミが底にたまって10年経ると海が弱ってくる。ここは汚れを潮流が掃除してくれる。

③ 真珠母貝の天然白蝶貝はインドネシア全域から集める。イリアン、アルー、バンガイ、アンボン、ジャカルタ沖のスリブ島などで、地元の潜水夫が集めたものを買う。この会社は1万個の母貝を持っている。採苗養殖の貝も試しているが、母貝が小さいので大きい珠はとれない。集めた母貝は1カ月間前養生のためにこの海に入れておく。その後、核入れ手術をする。8mmの核に外套膜のチップを乗せて入れる。核入れは5月から10月まで毎日やる。そのあと、充分養生する。貝の状態は1つずつ違うので、結果は1つずつ違う。大手術だから死ぬものも多い。30年の経験があるといっても小学校の生徒位の気持ちだ。生き物の変異はきりが無い。手術そのものはそう難しくもないので、技術移転は可能だろうが、前養生、後養生の気の配り方が難しい。2年足らずで、うまくいくと16mmの珠が出来る。核が8mmだから真珠層が4mm成長しているわけだ。厚いので艶も消えないし、はげることもない。

④ 盗難が最大の問題である。この会社では海軍に頼んで警戒ポストを5カ所置いている。それでも一晩に数十枚のカゴを盗られることがある。コロノ湾の会社は一晩に千枚のカゴを盗られることがある。千枚のカゴというと10トン位の漁船ではとても無理な量だから、どんな方法で盗って運ぶのか不思議な程であると平賀さんは笑う。

平賀さんは熟練した職人である。そしてその話には職人道が生きている。小浜で真珠養殖の小さな作業場を訪れた時、真珠母貝の供養塔を作っているのを思い出して、ここではどうか尋ねてみた。氏は言った。「それは気になっているんだ。供養せ

ないかんと思っているけどまだやってないんだ。調子のよい貝は2回、3回と繰り返して核を抱けるから貝の寿命は生かしたことになるけれどな、しかし死ぬ貝も相当おるからな、気になっている。近い内に供養塔を建てて、ねんごろに供養しようと思ってるんや」。

私は誇らしい気持ちになってその話をハムカやラ・ファリキ達に伝えた。生き物を相手にする職人が、技術を磨くことだけでなしに、生き物をいとおしむことが大事だという職人魂を伝えたかったのだ。日本人が怪物でなくて血の通った人間であることを伝える良い例だと思ったのである。彼等の反応は様々で、少しは意図が通じたところもあるようだが、期待した程の意志疎通は出来なかったようである。むしろ、その16mmの真珠はいくらで売れますかという質問が返ってきた。

伝統的方法で漁をしている漁民の方がむしろ良く理解してくれたに違いない。ピンランのランガの漁民やマンダール人の漁民、ガレソンのトビタマ漁民などはよく判ってくれるだろうと思った。しかし漁民でも近代的方法を駆使して、物をすくい上げる感じになってくると共感の基盤は崩れてくるだろう。大学や試験場の人間になると共感の基盤は殆どなくなるかもしれない。ハサヌディン大学のアリフィン・サラタン氏やマツラダ氏達がスラウェシの沿岸集落を調査し、漁民や農民の伝統的な技術と知恵、伝統的な物流ルートの技術を掘り起こし、支援しようという計画は、稀有な例外だという気がする。彼等に平賀さんのような日本の職人道を体現した人を引き合わせたいと思う。平賀さんだけでなく、日本の沿岸漁村で頑張っている漁協のリーダーや漁師、農・山村の人々がスラウェシの沿岸集落の人々と直接草の根交流をすることが両側に今一番大事な事だと思う。会社と商品だけを介した接触は資源の枯渇を進めるだけ、両側の誤解を増大させるだけ、特に怪物日本の誤ったイメージを膨らませることになる、そんな気がするのである。